

平木遺跡群

平木A遺跡

平木B遺跡

平木D遺跡

県営ほ場整備事業御手洗・出城地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

石川県立埋蔵文化財センター

平木遺跡群

平木A遺跡

平木B遺跡

平木D遺跡

県営ほ場整備事業御手洗・出城地区
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は石川県松任市に所在する平木A遺跡、平木B遺跡、平木D遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. これらの遺跡の発掘調査は、県農林水産部耕地整備課所管の県営は場整備事業御手洗・出城地区に關係して、同課の依頼により県立埋蔵文化財センターが事前の発掘調査を実施したものである。事前協議および調査の実施に際して、県耕地整備課、県松任土地改良事務所、地元工区長などから多大な協力を得た。感謝したい。
3. 遺跡の発掘調査は、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の保存に影響が生じる工事箇所に限定して実施することとした。当工区では排水路設置箇所が該当し、排水路施工にともなう工事掘削幅2mを発掘調査の対象としているが、その他の田面部に存在する遺跡については、県立埋蔵文化財センターが実施した事前の分布調査結果に基づいて盛土工法の措置をとり、水田下に現状での保存をはかっている。
4. 各遺跡の調査期間、面積および担当者は第2章に記したとおりである。
5. 各遺跡の発掘調査および出土品整理、報告書刊行にかかる費用は、県教育委員会・県立埋蔵文化財センターとの協議にもとづく県耕地整備課の費用負担と文化庁の補助金による。
6. 出土品整理作業は、平成4年度に県立埋蔵文化財センターが社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。
7. 本書の編集は富田和氣夫が担当し、以下のように分担して執筆した。

第1、2、5、6章	安　英　樹
第3章	富田　和氣夫
第4章	垣内　光次郎
8. 本書の挿図に記した方位は座標北で表示している。水平高は海拔高である。

目 次

第1章 位置と環境	(安 英樹) ...	1
第1節 周辺の地勢	1	
第2節 周辺の遺跡	1	
第2章 調査の経緯と経過	(安 英樹) ...	3
第1節 第1次(平成2年度)調査の経緯と経過	3	
第2節 第2次(平成3年度)調査の経緯と経過	3	
第3節 出土遺物の整理作業	4	
第3章 平木A遺跡の発掘調査(平成2年度)	(葛田和氣夫) ...	5
第1節 調査の概要	5	
第2節 遺構と遺物	7	
第4章 平木D遺跡の発掘調査(平成2年度)	(垣内光次郎) ...	17
第5章 平木A遺跡の発掘調査(平成3年度)	(安 英樹) ...	23
第1節 調査の概要	23	
第2節 微地形と層序	23	
第3節 遺構と遺物	23	
第4節 小 結	25	
第6章 平木B遺跡の発掘調査(平成3年度)	(安 英樹) ...	27
第1節 調査の概要	27	
第2節 微地形と層序	27	
第3節 遺構と遺物	29	
第4節 小 結	37	

挿図目次

第1図	平木遺跡群の位置 (S = 1 / 2,000,000)	1
第2図	周辺の遺跡分布 (S = 1 / 25,000)	2
第3図	平木遺跡群発掘調査区位置図 (S = 1 / 5,000)	4
第4図	平木A遺跡調査区の位置 (S = 1 / 3,000)	5
第5図	平木A遺跡調査区全体図 (S = 1 / 150)	6
第6図	平木A遺跡遺構実測図1 (S = 1 / 60)	9 • 10
第7図	平木A遺跡遺構実測図2 (S = 1 / 60)	11
第8図	平木A遺跡第1号住居跡出土土器 (S = 1 / 3)	12
第9図	平木A遺跡第1号住居跡出土石製品 (S = 1 / 2)	13
第10図	平木A遺跡第2号住居跡とその周辺の出土土器 (S = 1 / 3)	13
第11図	平木A遺跡第3号住居跡および土坑出土遺物 (S = 1 / 3)	14
第12図	平木A遺跡包含層出土土器 (S = 1 / 3)	15
第13図	平木A遺跡包含層出土石製品 (S = 1 / 2)	16
第14図	平木D遺跡調査区の位置 (S = 1 / 3,000)	17
第15図	平木D遺跡調査区全体図 (S = 1 / 100)	18
第16図	平木D遺跡遺構実測図1 (S = 1 / 60)	19
第17図	平木D遺跡遺構実測図2 (S = 1 / 60)	20
第18図	平木D遺跡出土遺物1 (S = 1 / 3)	21
第19図	平木D遺跡出土遺物2 (S = 1 / 3)	22
第20図	平木A遺跡調査区全体図 (S = 1 / 150)	24
第21図	平木A遺跡土層断面図 (S = 1 / 60)	24
第22図	平木A遺跡主要遺構実測図 (S = 1 / 60)	24
第23図	平成3年度調査区位置図 (S = 1 / 3,000)	26
第24図	平木B遺跡調査区全体図 (S = 1 / 150)	27
第25図	平木B遺跡土層断面図 (S = 1 / 60)	28
第26図	平木B遺跡主要遺構実測図(1) (S = 1 / 60)	28
第27図	平木B遺跡主要遺構実測図(2) (S = 1 / 60)	31
第28図	平木B遺跡出土弥生土器実測図 (S = 1 / 3)	33
第29図	平木B遺跡出土石器類実測図 (S = 1 / 2, 1 / 3)	34
第30図	平木B遺跡出土土師器・須恵器他実測図(1) (S = 1 / 3)	35
第31図	平木B遺跡出土土師器・須恵器他実測図(2) (S = 1 / 3)	37

写真図版目次

写真図版1	平木遺跡群遠景（北から）
写真図版2上	平木A遺跡（平成2年度） 調査区東半部全景（西から）
写真図版2下	平木A遺跡（平成2年度） 調査区西半部全景（東から）
写真図版3上	平木A遺跡（平成2年度） 第1号住居跡全景（東から）
写真図版3下	平木A遺跡（平成2年度） 第1号住居跡全景（西から）
写真図版4上	平木A遺跡（平成2年度） 第1号住居跡の集石（東から）
写真図版4下	平木A遺跡（平成2年度） 第1号住居跡東壁際の土層断面（南から）
写真図版5上	平木A遺跡（平成2年度） 第2号住居跡・第8号土坑全景（西から）
写真図版5下	平木A遺跡（平成2年度） 第2号住居跡・第8号土坑全景（東から）
写真図版6上	平木A遺跡（平成2年度） 第3号住居跡全景（西から）
写真図版6下	平木A遺跡（平成2年度） 第3号住居跡炉跡（北から）
写真図版7上	平木A遺跡（平成2年度） 第3号住居跡と第1号土坑（南東から）
写真図版7下	平木A遺跡（平成2年度） 第3号住居跡東壁際の土層断面（南から）
写真図版8上	平木A遺跡（平成2年度） 第1号土坑土層断面（南から）
写真図版8下	平木A遺跡（平成2年度） 第1号土坑充堀状況（南から）
写真図版9上	平木A遺跡（平成2年度） 第8号土坑全景（西から）
写真図版9下	平木A遺跡（平成2年度） 第1号溝（西から）
写真図版10上	平木A遺跡（平成2年度） 10区の溝と土坑群（東から）
写真図版10下	平木A遺跡（平成2年度） 調査風景（西から）
写真図版11上	平木A遺跡（平成2年度） 第1号住居跡出土土器
写真図版11下	平木A遺跡（平成2年度） 第2号住居跡とその周辺の出土土器
写真図版12上	平木A遺跡（平成2年度） 第3号住居跡と土坑の出土土器
写真図版12下	平木A遺跡（平成2年度） 包含層出土土器
写真図版13上	平木D遺跡（平成2年度） 調査区全景（南から）
写真図版13下	平木D遺跡（平成2年度） 調査区全景（北から）
写真図版14上	平木D遺跡（平成2年度） 第1号竪穴住居跡（南から）
写真図版14下	平木D遺跡（平成2年度） 第2号竪穴住居跡（北から）
写真図版15上	平木D遺跡（平成2年度） 第3号土坑（北から）
写真図版15下	平木D遺跡（平成2年度） 第3号溝（北から）
写真図版16上	平木D遺跡（平成2年度） 作業風景
写真図版16下左	平木D遺跡（平成2年度） 砥石（第1号住居跡）
写真図版16下右	平木D遺跡（平成2年度） 高壙（第8号ビット）

写真図版17上	平木A遺跡（平成3年度）	第1号溝（北から）
写真図版17下	平木A遺跡（平成3年度）	第2号溝（北から）
写真図版18上	平木A遺跡（平成3年度）	調査後全景（東から）
写真図版18下	平木A遺跡（平成3年度）	調査後全景（西から）
写真図版19上	平木B遺跡（平成3年度）	柱穴（南から）
写真図版19下	平木B遺跡（平成3年度）	第1号溝（北から）
写真図版20上	平木B遺跡（平成3年度）	第2号溝（北から）
写真図版20下	平木B遺跡（平成3年度）	落ち込み（西から）
写真図版21上	平木B遺跡（平成3年度）	1～2区遺構（西から）
写真図版21下	平木B遺跡（平成3年度）	5～6区遺構（東から）
写真図版22上	平木B遺跡（平成3年度）	調査後全景（東から）
写真図版22下	平木B遺跡（平成3年度）	調査後全景（西から）
写真図版23	平木B遺跡（平成3年度）	出土遺物
写真図版24	平木B遺跡（平成3年度）	出土遺物

第1章 位置と環境

第1節 周辺の地勢

平木遺跡群は、松任市平木町に所在する。周辺は、県下最大河川である手取川によって形成された手取川扇状地の一部であり、越前を頂点とした扇形の末端部にあたる。手取川は古来よりその流路を変え続けており、現在の七ヶ用水を次々に河道として南進してきたことが知られている。縄文後・晩期には既に徳光町より南にあったと推定され、この地への遺跡の出現と時期的に合致する。当地に限ったことではないが扇状地では、発達した小河川の解釈により、放射状の流路に沿って島状の微高地が形成され、両者が複雑に交錯した地形をなす。当地の遺跡は、平木遺跡群新遺跡も含めてそうした微高地に立地しており、それによって安定した居住域と水利を得たものであろう。このような微地形は明治期以降の耕作整理によって削平を受け、現在では見ることはできない。手取川扇状地の扇端部は松任市域を始めとしてほとんどが水田化され、県下の一大穀倉地帯となっている。



第1図 平木遺跡群の位置 ($S = 1/2,000,000$)

第2節 周辺の遺跡

手取川扇状地の扇端部で遺跡が確認されるのは、現状では縄文後期末まで溯れる。一般には、気候の寒冷化やまた手取川の南下に伴う地形の安定が低地への進出を促したと理解されており、平木遺跡群の周辺では、徳光遺跡（第2図5）から採集された縄文晩期に位置付けられるらしい粗製土器がもっとも古相を示す。弥生中期の遺跡はやや数を増し、徳光ヨノキヤマ遺跡（10）、野本遺跡（25）、相川新遺跡（31）などで見られる。さらに東へ目を移すと、八田中ヒエモンド遺跡、横江古屋敷遺跡、上荒屋遺跡などが追加される。各遺跡間にはそれぞれある程度の距離が空いて展開するが、7.5m前後のほぼ同標高を測り、それらを線で結ぶと扇状地の常として当然扇形を描く。各遺跡は弥生中期でもやや時期が異なるものや、性格が不明確なものもあるが、この時期に扇端部の大小の水系で画される地域毎に主要集落が形成された可能性が考えられる。

弥生後期、特に後半期以降は遺跡が極端に増加する時期と言える。後期後半期から終末期には平木遺跡群のほか、周辺に中相川遺跡（20）、東相川B遺跡（17）、相川新遺跡、野本遺跡、浜相川遺跡（26）など多くの遺跡が近接して存在し、きわめて遺跡密度が高まっている。各遺跡がどんな事情で群在して成立し、またどんな関係にあったのかきわめて興味深い問題であり、このよ

うな弥生後期遺跡群の存在は、当地の大きな特徴と言えるものである。

古墳時代まではこうした遺跡群は存続せず、遺跡数自体も減少する。古墳中期・後期と引き続く遺跡はほぼ皆無と言え、新たに出現するものを除くと、前期で終息するか、または相川新遺跡のように断続的に中期・後期に活動するかのパターンとなる。古墳の出現を画期とした集落・墓域の解体と再編成の過程なのであろうか。

古代においては、北安田北遺跡（15）のようにやや扇状に寄って位置する遺跡がよく見られ、灌漑技術の進歩が窺われる。また、繼起性に乏しい遺跡が多い中で、東相川B遺跡（17）は、短期間の絶続をおくものの弥生後期から奈良時代まで継続する例外的な遺跡と言える。

中世においては、伝承や文献に残る遺跡が多く見られ、徳光館跡（6）、徳光聖興寺遺跡（9）、相川館跡（22）などがあげられる。平木町については、弘治三年（1557年）の梶井門跡知行目録（三千院文書）には「加州平木庄」の地名が見られるが、詳細なことはわかっていない。

参考文献

石川県教育委員会『石川県遺跡地図』 1992年

平凡社『石川県の地名』日本歴史地名体系17 1991年



第2図 周辺の遺跡分布 (S = 1 / 25,000)

- 1 平木A遺跡（弥生後期）、2 平木B遺跡（弥生後期・古代）、3 平木C遺跡（不詳）、4 平木D遺跡（弥生後期）、5 徳光遺跡（鷹文）、6 徳光館跡（不詳）、7 アベノ翻証寺跡（不詳）、8 大和隼人館跡（不詳）、9 徳光聖興寺遺跡（宝町）、10 徳光ヨノキヤマ遺跡（弥生・中世）、11 徳光B遺跡（不詳）、12 徳光C遺跡（不詳）、13 徳光古麗敷遺跡（古墳）、14 徳光ジョウガチ遺跡（弥生）、15 北安田北遺跡（鷹文・平安）、16 東相川遺跡（古墳・中世）、17 東相川B遺跡（弥生・奈良）、18 東相川C遺跡（不詳）、19 東相川D遺跡（不詳）、20 中相川遺跡（弥生後期）、21 中相川古墳（古墳中期）、22 相川館跡（室町）、23 郡手洗川遺跡（古墳）、24 郡手洗川B遺跡（弥生後期）、25 野本遺跡（弥生中期・後期）、26 浜相川遺跡（弥生・古墳）、27 浜相川B遺跡（弥生・古墳）、28 浜相川C遺跡（弥生）、29 浜相川D遺跡（弥生）、30 浜相川E遺跡（弥生）、31 相川新遺跡（弥生・古墳・中世）、32 浜相川・相川新遺跡（弥生・古墳）

第2章 調査の経緯と経過

第1節 第1次（平成2年度）調査の経緯と経過

石川県農林水産部耕地整備課（以下、県耕地整備課）では昭和50年代後半から松任市域の水田のは場整備事業を実地している。その事業内容は水田の区画の大型化及び農道・用排水路の整備であり、その実施により大型機械の導入と灌漑不良田の一掃を可能にし、農業経営の近代化と環境の改善を目指すものである。

松任市北西部の各町、竹松・相川新・徳光・平木町については御手洗・出城地区として昭和60年度に着工された。平木工区については平成2年度・3年度の施工が計画され、石川県立埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）は、県耕地整備課からの施工区域内の埋蔵文化財の有無の照会に対して、工事前の分布調査が必要であると平成元年9月8日付けで回答している。そして県埋文センターは平成2年度工区の水田27haを対象として、バックホーを用いた試掘による分布調査を平成元年10月11日から13日にかけて実施した。施工区域内には周知の遺跡はこれまで確認されていなかったが、分布調査の結果、2遺跡を新たに発見し、平木A遺跡、平木D遺跡と命名している。両遺跡は出土遺物から弥生時代・古墳時代の集落遺跡と推定された。

県埋文センターは同年11月4日付けで県耕地整備課に回答し、遺跡の所在とその範囲・包含層までの地表深度を報告すると共に、田面工事に際しては盛土工法等によって包含層上に厚さ10cm以上の保護層を設けて、遺跡に損傷を与えないように施工担当の松任土地改良事務所に指導している。遺跡の範囲内で排水路が設置される部分については、保存が不可能なため発掘調査が必要となり、県耕地整備課は平成2年3月29日付けで、県埋文センターに発掘調査を依頼し、県埋文センターでは平成2年度の調査を計画し、その旨、通知した。これにより平木遺跡群の第1次調査すなわち、平木A遺跡、同D遺跡の発掘調査の実施が決定した。

第1次調査の調査期間、調査面積、調査担当者および調査補助員、作業員は下記の通りである。

調査期間 平成2年8月21日～10月20日 調査面積 約450m²

調査担当 垣内光次郎、富田和氣夫 調査補助員 藤重 啓

作業員 藤本春枝（村井新町）、打木喜美江、東陽子、山静子、山信子（相川町）

第2節 第2次（平成3年度）調査の経緯と経緯

平成3年度の県営は場整備事業御手洗・出城地区平木工区の施工予定区域は、第1次調査が行われた平成2年度施工区域の南側にあたり、平木の集落を挟んでその反対側に位置する。前年度と同様に県耕地整備課からの照会に対して県埋文センターは分布調査が必要であると平成2年9月13日付けで回答し、平成2年9月25日に施工区域の水田5haを対象にバックホーを用いた試掘による分布調査を実施した。その結果、2箇所で遺跡の広がりが確認された。1箇所は現集落

から伸びてきており、平成2年度事業に係る分布調査で発見された平木A遺跡と同一遺跡と推定される。もう1箇所はより南東の北安田・成町により位置しており、新発見の遺跡である。出土遺物からは平安時代の集落遺跡と推定され、平木B遺跡と命名された。県埋文センターはその旨、平成2年11月5日付けで県耕地整備課に回答し、その回答を元にして施工担当の松任土地改良事務所と協議した結果、第1次調査と同様に、排水路が設置される部分について県埋文センターが発掘調査を行うことで合意している。年度が改まった平成3年の4月、県耕地整備課は県埋文センターに発掘調査を依頼し、県埋文センターでは松任土地改良事務所と協議の上、年度後半の調査を計画し、回答した。これによって平木遺跡群の第2次調査の実施が決定した。

第2次調査の調査期間、調査面積、調査担当者および調査補助員、作業員は下記の通りである。

調査期間 平成3年11月5日～11月27日 調査面積 約240m²

調査担当 堀内光次郎、安 英樹 調査補助員 松田英博

作業員 藤本春枝（村井新町）、打木喜美江、東みどり、山静子、山信子（東相川町）

第3節 出土遺物の整理作業

出土遺物は弥生土器が大半であり、第1次調査がパンケース10箱、第2次調査がパンケース2箱の量であった。出土遺物の整理作業は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会へ委託して行っており、洗浄作業についてはそれぞれの調査年度に、注記・接合・復元・実測・トレース作業は第1次調査・第2次調査を合わせて平成4年度に実施した。



第3図 平木遺跡群発掘調査区位置図 (S = 1 / 5,000)

第3章 平木A遺跡の発掘調査（平成2年度）

第1節 調査の概要

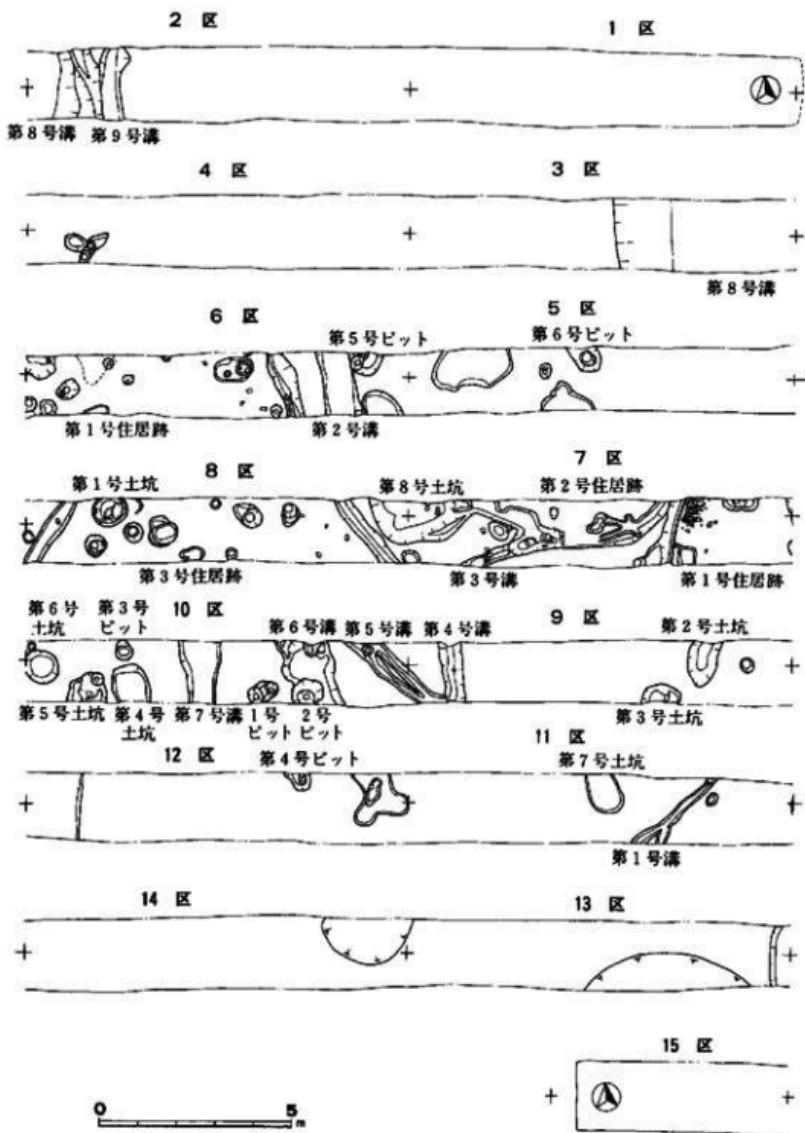
平木A遺跡は石川県松任市平木町地内に所在する。遺跡の存在は今回の県宮闈場整備事業御手洗出城地区に伴って平成元年度に実施した試掘調査で確認したもので、現平木町集落に北接する位置に南南西から北北東にかけて楕円形状に広がる南北約220m、東西約60～130mの区域が遺跡の範囲と推定できる。

発掘調査は盛土工法による遺跡の保存処置が困難な排水路設置部分を対象とし、現集落の北縁を画する集落道から北方約50mの地点に、東西方向に伸びる幅2m、延長約146mの調査区を設定した（第4図）。遺跡推定範囲との関係では、その南縁寄りの地区を東西に横断した調査区となる。調査区内は調査区の東端を基点として約10mピッチで1区から15区までに区画して調査にあたった。

基本的な層序は上層から約30cmが水田耕作土、以下約20cmが遺物包含層、以下地山面となる。水田耕作土層（1a～1e層）中には耕作土と床土のセットからなる3面の水田面や溝（2層）の存在が土層断面から確認できるが、面的な検出作業をおこなっていないため、所属時期については弥生時代後期の遺物包含層形成以降であることを確認するに留まる。遺物包含層（3層）に



第4図 平木A遺跡調査区の位置 (S = 1 / 3,000)



第5図 平木A遺跡調査区全体図 (S = 1 / 150)

含まれる遺物は弥生時代後期後半の土器片が主体を占めており、その他若干の古代土器片が出土した。地山層（6層）は淡黄褐色ないし淡灰黃褐色の粘質土で標高9.8m前後の高さである。

検出した遺構の分布状況は調査区の東縁2区から西縁13区の範囲に広がっており、特に5区から11区にかけて弥生時代後期後半の竪穴住居跡、土坑、溝等が濃密に分布する。包含層からの遺物出土量も遺構分布状況を反映したものであり、この付近に平木A遺跡の中心部分の一画を求めて大過なかろう。

第2節 遺構と遺物

先に触れたように、今回の調査では遺跡範囲の中ほどの5区から11区にかけて弥生時代後期後半に属する遺構群を検出した。このうち遺構の平面形や掘り込みが明瞭な主要遺構は竪穴住居跡3、土坑8、溝7、ピット6となる。竪穴住居跡が位置するのは6～8区で、その他の遺構は住居跡群の西方9～11区に主に分布する傾向がある。住居跡群の東方では同時期の遺構分布は希薄になるが、調査区東端近くの2区で時期不詳の大形溝状遺構（第1号溝）を検出している。

（1）竪穴住居跡

第1号住居跡（第6、8、9図）

6～7区に位置する。調査区域が限定されているため遺構の全貌を明らかにするに至っていないが、平面形は東西壁がわずかに弧状を呈することから円形であろうと推定できる。両壁の開き具合から見れば、調査区が位置するのは円形住居の中央部ではなく、やや北寄りの区域を横切っているのであろう。規模は調査区南壁で東西10.66mを計り、未調査部分を含めた第1号住居跡全体としては、直径11m前後の規模をもつものと推定する。遺構検出面までの壁面の立ち上がりは25cm前後、床面の標高は9.5m前後である。

住居跡内の覆土は暗褐色土系の上層（5a～5c層）と灰褐色土系の下層（5d～5g）に区分できる。上層覆土には、より上層に位置する水田土壤の影響によるものと考えられる酸化鉄の沈着が特徴的に観察され、下層の覆土のうち、住居跡の周縁部に堆積する土層には地山黄褐色土の粒子ないしブロックが混入する。土層の堆積状況は1号住居跡廃絶後に自然埋没の経過を辿ったことを示している。なお、第1号住居跡北西隅では住居跡の壁および覆土が第2号住居跡の構築に伴って切り込まれている状況が観察され、第1号住居跡は第2号住居跡に先行することを示している。

床面には幾つかのピット類が検出されている。このうちP1は上面で57×46cm、深さ42cmで、上屋構造を支える主柱穴の一つであろう。近接するP7、P8および東壁際のP6は径25～30cm、深さ42cm、31cm、深さ26cmで、共に何等かの柱穴として機能していた可能性がある。西壁の外側で検出されたP9も径32cm、深さ24cmと同様の規模を有している。調査区北壁にかかるP3、P4は径90cm、92cm、深さ18cm、23cmを計る土坑状の掘り込みである。その他の掘り込みはいずれも深さ10cm以内と浅い。また、壁際には壁溝が存在する。幅、深さとも15cm前後で、東壁の壁溝

覆土は板壁の設置を示す堆積状況を残す。炉跡は検出してないが、住居跡の中央P 8付近には炭層が薄く散布しており、P 4とP 8の間にも炭と灰の薄層が広がっていた。一方、住居跡西側壁溝の際には円礫の集中堆積部が存在した。円礫堆積の範囲はおよそ50×80cm、最大厚15cmで、床面直上に位置している。円礫群の構成は粒径12cm前後と7cm前後のものが45個前後で、その間に1cm前後、3～4cm前後の小円礫が比較的均質に混入し、礫群の内部および周囲には粗い砂が含まれる。河川の礫床から一括で運び込まれたよう状況を呈しているが、その目的は不明である。

出土遺物は弥生時代後期の土器が主である。いずれも覆土中に混入していたもので、時期幅が認められる。第8図1～3、12、14、16などは法仏式期、他は月影式期に属する土器であろう。

第2号住居跡（第6、10図）

7区に位置する。平面形は円形ないし隅円方形と推定され、後者とすると住居跡の南辺の一部から南東隅および東辺の一部にかけての範囲を検出したものと思われる。調査区北壁にかかる範囲は5.2mであるが、住居跡主軸に斜交しているため、本来の規模は確定できない。検出面までの壁面の立ち上がりは12cm程度、床面の標高は9.65m前後である。

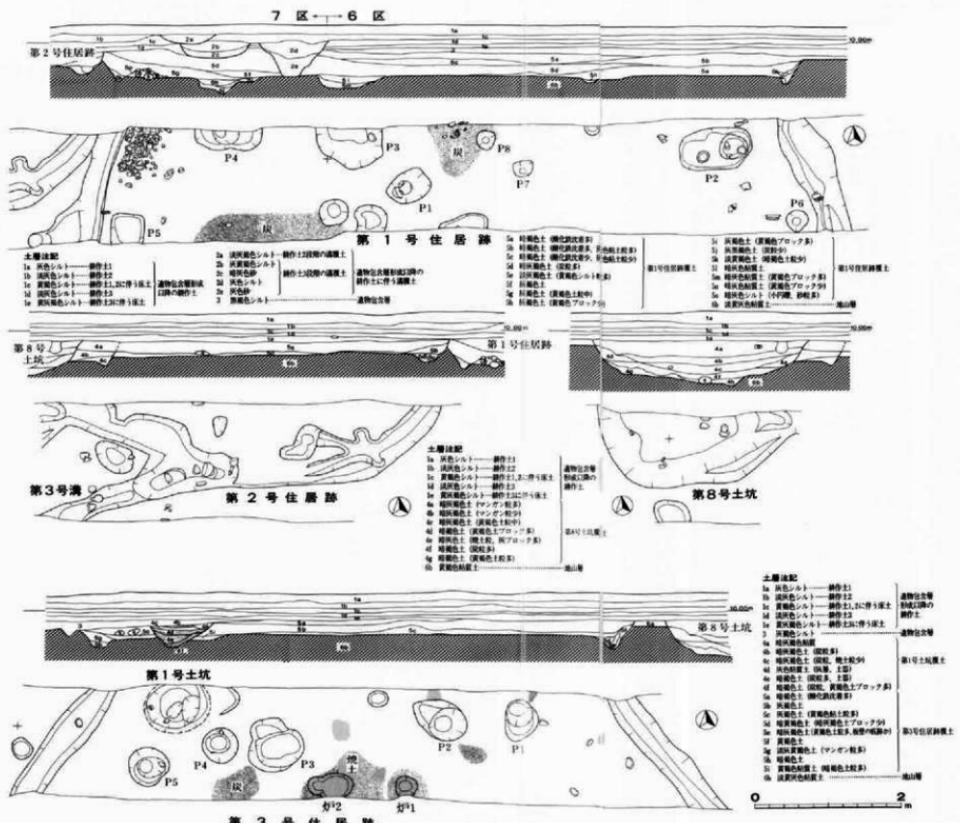
住居跡内の覆土は暗灰褐色土（5a）で、上層の水田土壤の影響を受けて酸化鉄の沈着やマンガン粒の混入が見られる。東壁は1号住居跡の覆土、壁面を切り込んで構築しており、壁際には地山の黄褐色粘土粒が多く含む暗灰褐色土が堆積する。第2号住居跡も廃絶後、自然埋没の経過を辿ったものと考えてよからう。なお、西接する第8号土坑の掘削によって南壁の一部が切り込まれており、第2号住居跡は第8号土坑に先行する。

床面には暗黄褐色土が薄く広がっており、貼床の可能性もあるが確証はない。壁際には壁溝が巡る。東壁際では幅30cm前後、深さ12cmほどで、覆土に板壁の痕跡を残している（5c）。壁溝は南東隅付近で枝分れして一旦跡切れ、南壁際で部分的に幅を広げて現れる。ただし、この部分は溝覆土と地山層との峻別に苦しんだ部分でもあり、調査時の掘りすぎによって壁溝形状が不安定になっている可能性を否定しきれない。なお、この付近から調査区の南西に向けて第3号溝のがびている。溝底は調査区南壁際で-8cm、第2号住居跡ほど低くなり、壁際で-25cmと一段と落ち込んで壁溝に連続する。第3号溝は第2号住居跡の掘り下げがほぼ完了した段階で検出したものであるため、切り合い関係は明らかにできなかったが、第2号住居跡に直接伴う溝ではないと思われる。

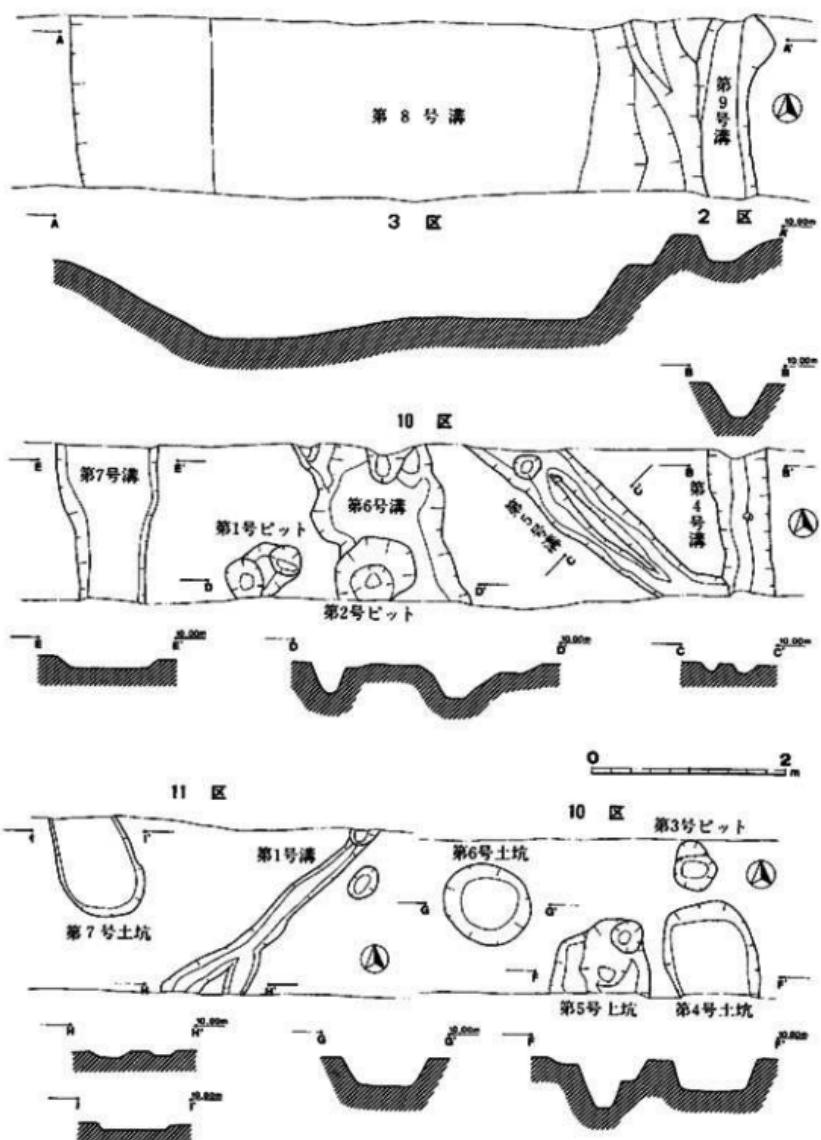
第10図に示した土器のうち確実に2号住居跡に伴うと判断できる土器は7、8の2点で、他は第2号住居跡に接続する第3号溝覆土中及び3号溝の周辺から出土したものである。

第3号住居跡（第6、11図）

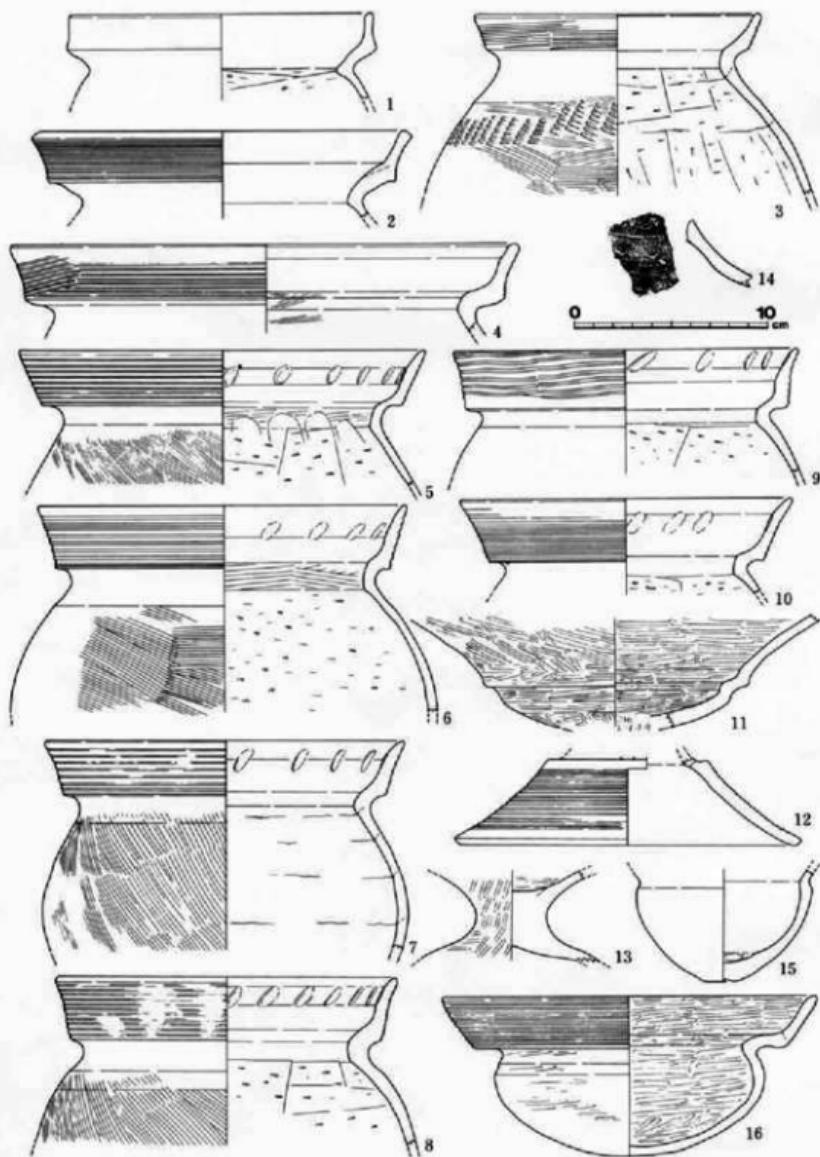
8区に位置する。調査が部分的であるため平面形は確定しにくいが、検出した二壁が共に直線的にのびていることから方形ないし隅円方形、あるいは五角形の堅穴住居跡ではないかと思われる。炉跡が床面の中央部に位置するすれば、調査区はほぼ住居の対角線状を横切っていることになる。検出範囲は調査区の北壁で7.44m、南壁で9.83mを計るが斜交しているため、二壁を直線的に延長して住居跡の主軸規模を推定すると、8m前後に復原できる。検出面までの壁面の立ち上がりは東側で15cm、西側で10cm前後、床面の標高は9.6m前後である。



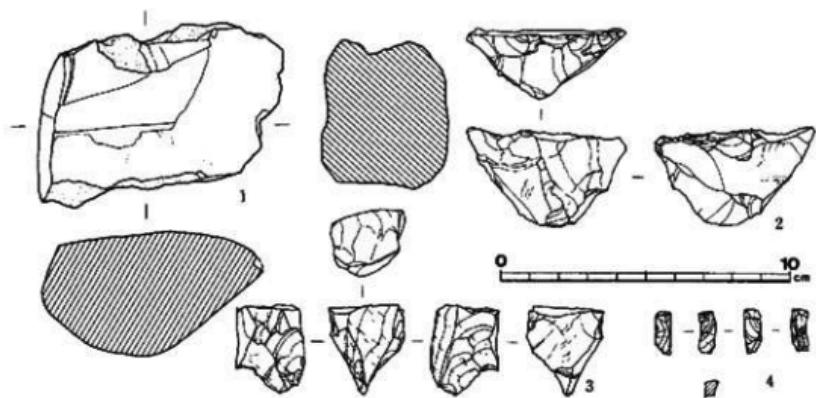
第6図 平木A遺跡遺構実測図1 (S = 1/60)



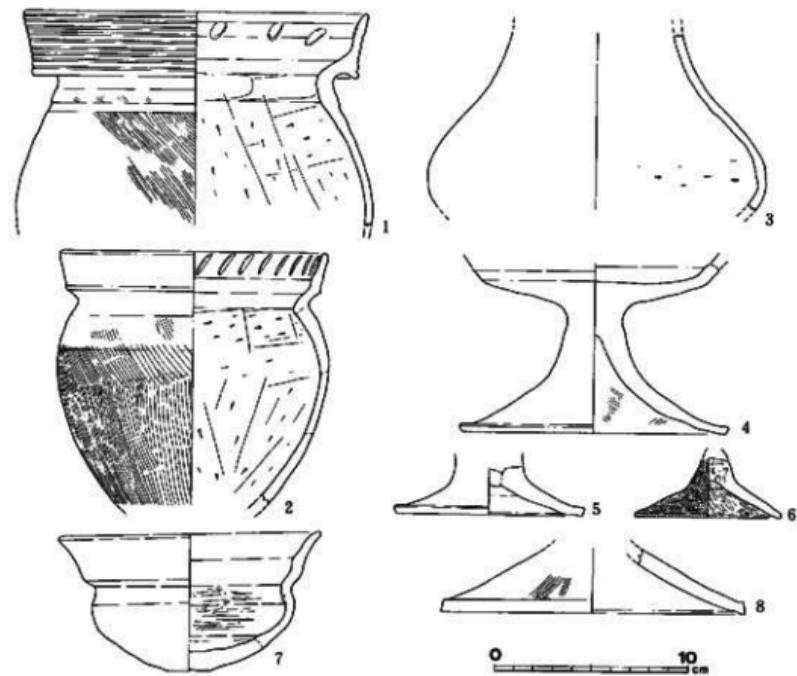
第7図 平木A遺跡遺構実測図2 (S = 1/60)



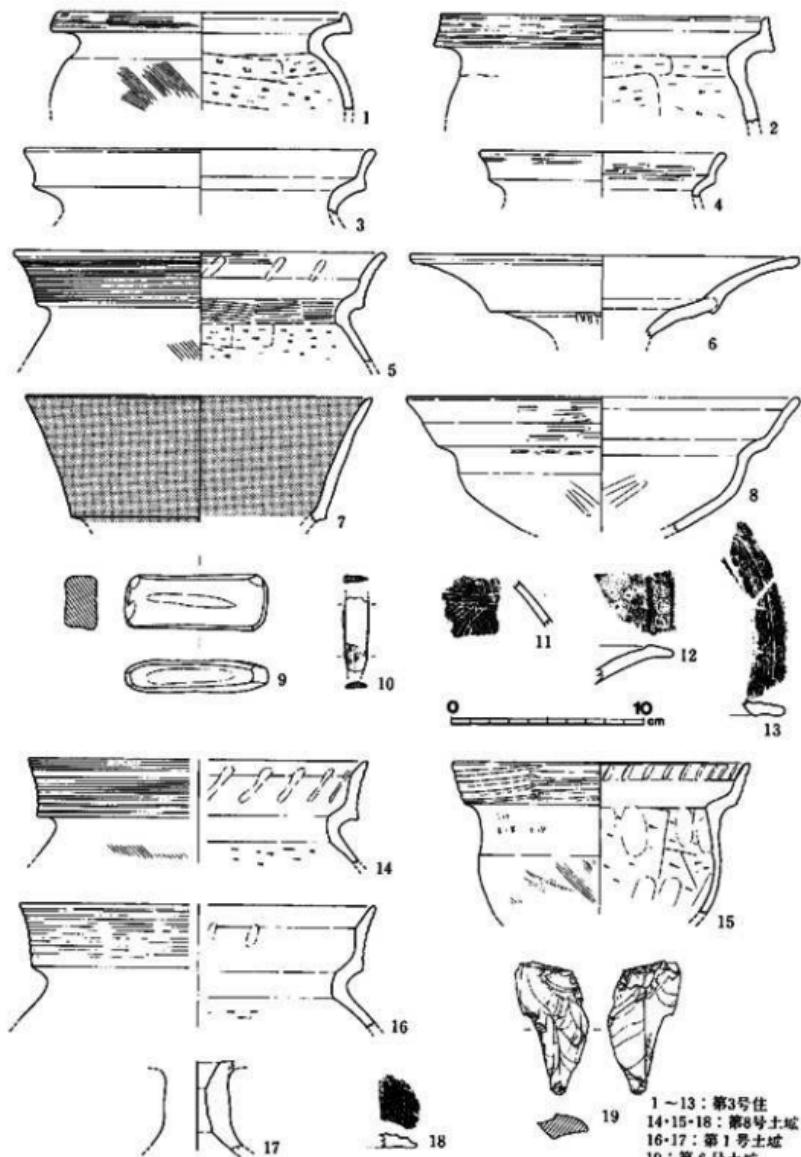
第8図 平木A遺跡第1号住居跡出土土器 (S = 1 / 3)



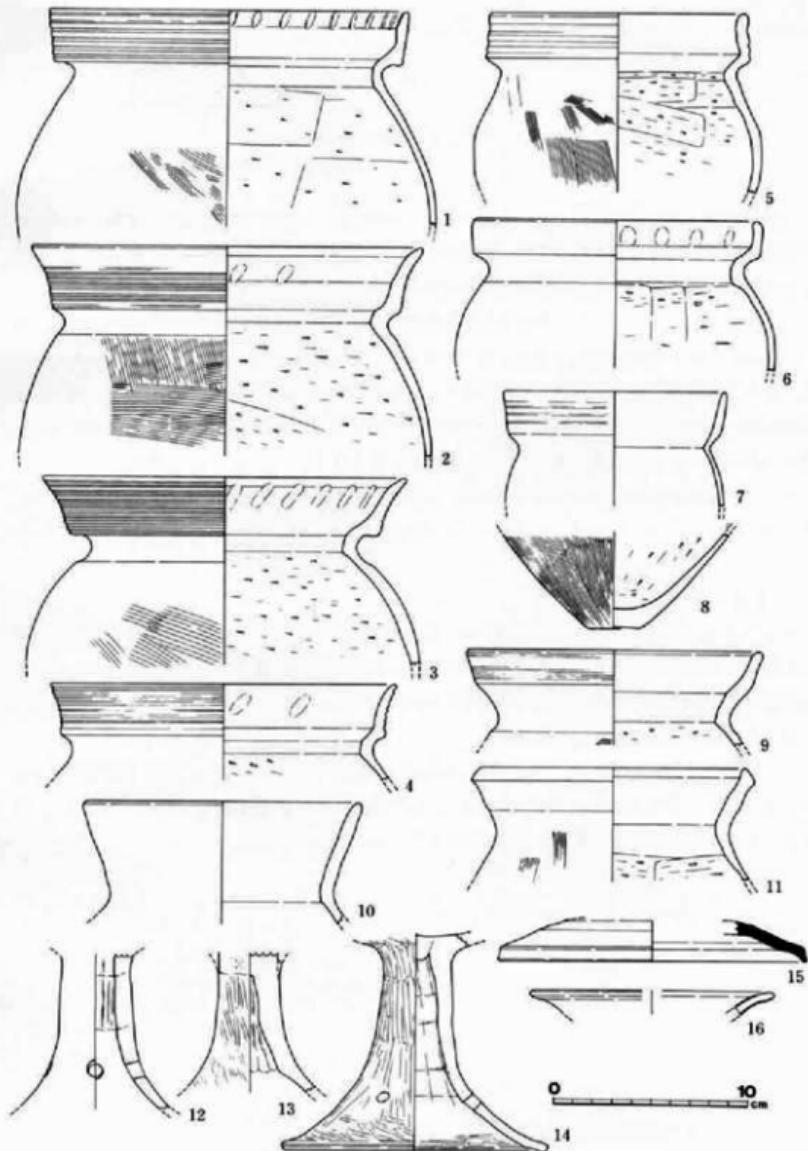
第9図 平木A遺跡第1号住居跡出土石製品 (S = 1 / 2)



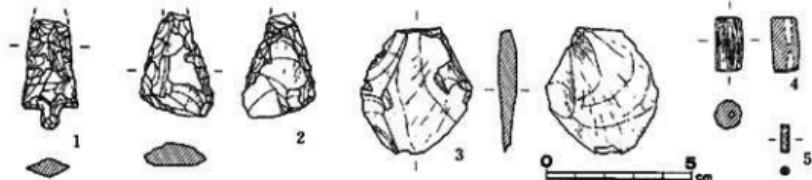
第10図 平木A遺跡第2号住居跡とその周辺の出土土器 (S = 1 / 3)



第11図 平木A遺跡第3号住居跡および土坑出土遺物 (S-1 / 3)



第12図 平木A遺跡包含層出土土器 (S = 1 / 3)



第13図 平木A遺跡包含層出土石製品 (S = 1 / 2)

住居跡の覆土は3層に区分でき、上層(5a)が酸化鉄の沈着する暗褐色土、中層(5b)が灰褐色土、下層(5c)が黄褐色粘土粒が多く混入する灰褐色土となる。なお、第1号土坑は第3号住居跡が自然埋没した後に掘り込まれており、第3号住居跡は第1号土坑に先行する。

床面には柱穴、炉跡、炭灰の散布等を検出した。P1～P4は深さがそれぞれ41cm、64cm、63cm、59cmと一定の規模を有しており、柱穴であろう。特にP2、P3は形状も安定しており、主柱穴になる可能性がある。壁際には壁溝が巡る。幅約35cm、床面からの深さ約15cmで、覆土の堆積状況は板壁の設置を示している。炉跡は床面中央付近で2ヶ所確認した。いずれも床面を若干掘り窪めた地床炉で、周囲に焼土粒や炭灰の薄層が散布する。

第3号住居跡から出土した土器(第11図)も時期幅があるが、法仏期のものが中心的である。9の砥石はP1から、10の刀子片は覆土中から出土した。

(2) 土坑、ピット、溝

第1号土坑(第6図)は8区に位置する。第3号住居跡廃絶後、その覆土を平面円形、掘り鉢状に掘り込んだものである。上面規模は92×73cm、深さ34cmで、覆土に炭粒や灰、弥生土器小片を多量に混入するが、壁面に直接火を受けた形跡はない。

出土土器は月影期に属する(第11図)。

第8号土坑(第6図)は第2号住居跡と第3号住居跡の中間部に位置し、第2号住居跡の壁面を一部切込んで掘り込まれた長軸110cm以上、短軸55cm(検出部の計測値)以上、深さ約50cmの土坑である。法仏期から月影期の土器が出土した(第11図)。

第4章 平木D遺跡の発掘調査（平成2年度）

今回の調査区は昭和63年度に実施した平木D遺跡1区～6区の北方向延長部分にあたり、豊穴住居跡2基、溝4条、土坑3基等の遺構が検出された。その概要は下記のとおりである。

第1号豊穴住居跡（第16図）は調査区南端部に位置し、調査区内で確認した。平面規模は5.4mを測る。平行に走る壁溝の存在から、方形ないし隅丸方形プランと推測され、床面には落込みが存在するが、柱穴は未確認である。遺物は床面中央付近で法仏式期の土器（第18図）がまとまって出土した他、南側壁溝から砥石（第19図17）が出土した。

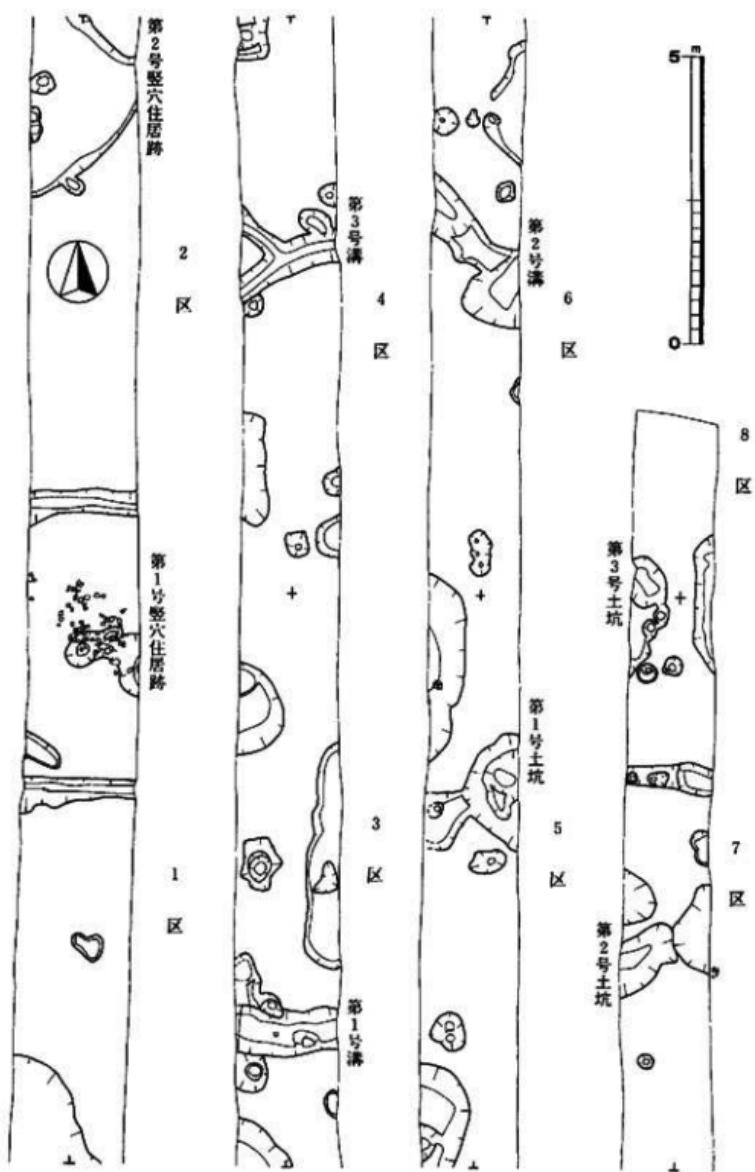
第2号豊穴住居跡（第16図）は第1号住居跡の北側に位置する。部分的な検出にとどまるため、全体規模は不明であるが、壁溝をもたない方形プランの豊穴住居であると推定される。覆土中から法仏式期の小型の甕（第19図11）が出土した。

第1号溝は3区に位置し、幅約80cm、深さ約15cm。法仏期の甕、高环片（第19図13、14）が出土した。その他の溝も規模に大差はない。土坑、ピット群のうち、第2・3号土坑は長さ1m前後、幅70cm前後、深さ30cm前後の規模をもち、土壤墓の可能性がある。

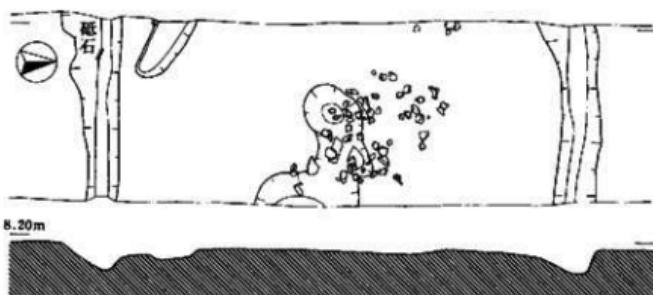
当遺跡は南方に豊穴住居を中心とする居住域、北方に溝や土壤墓からなる墓域を構成する小規模な集落跡の可能性が高い。遺跡の営まれた時期は弥生時代後期後半を中心である。



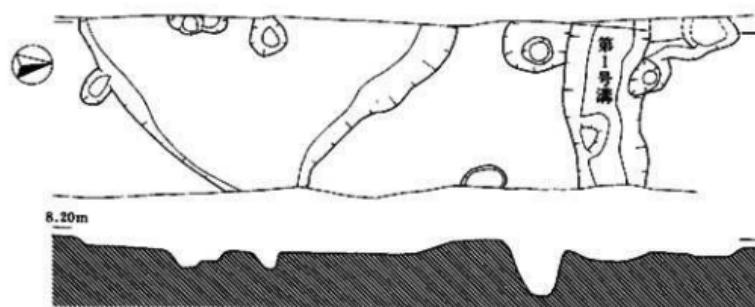
第14図 平木D遺跡調査区の位置 (S = 1 / 3,000)



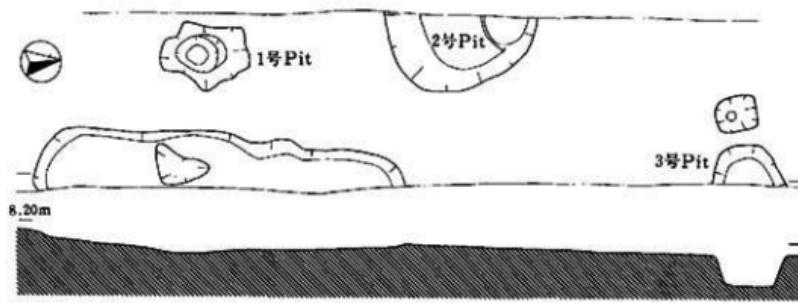
第15図 平木D遺跡調査区全体図 ($S = 1/100$)



第1号竪穴住居跡実測図(1・2区)



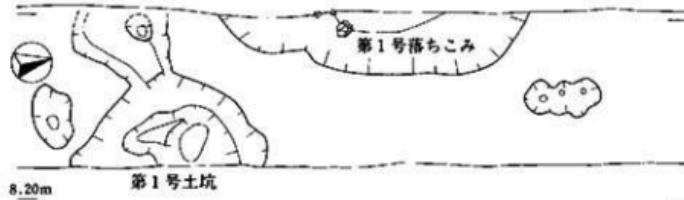
第2号竪穴住居跡実測図(2・3区)



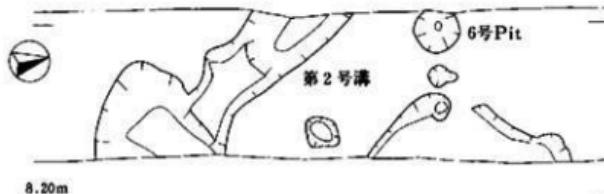
3・4区遺構実測図

0 2 m

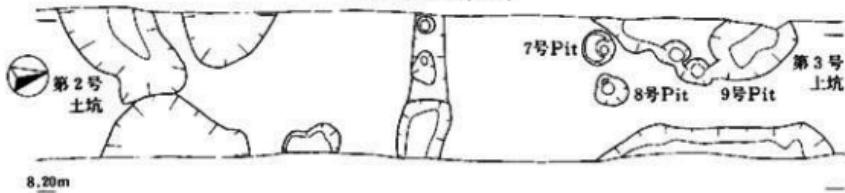
第16図 平木D遺跡遺構実測図1 (S = 1 / 60)



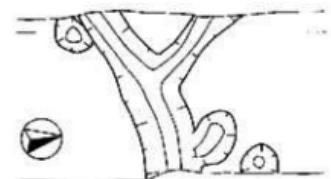
第1号土坑実測図(5・6区)



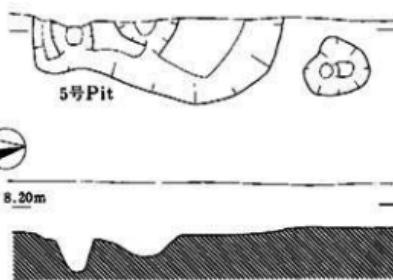
第2号溝実測図(6区)



第2・3号土坑実測図(7・8区)

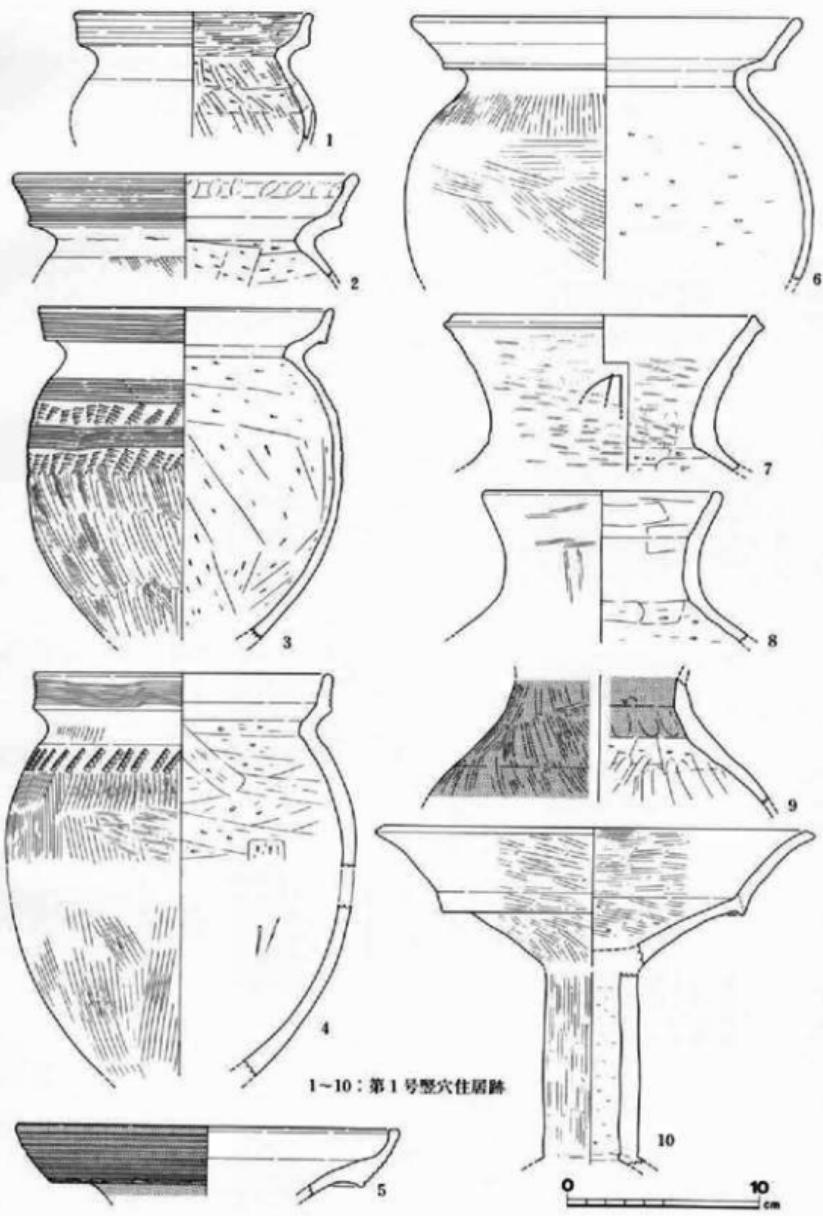


第3号溝実測図(4区)



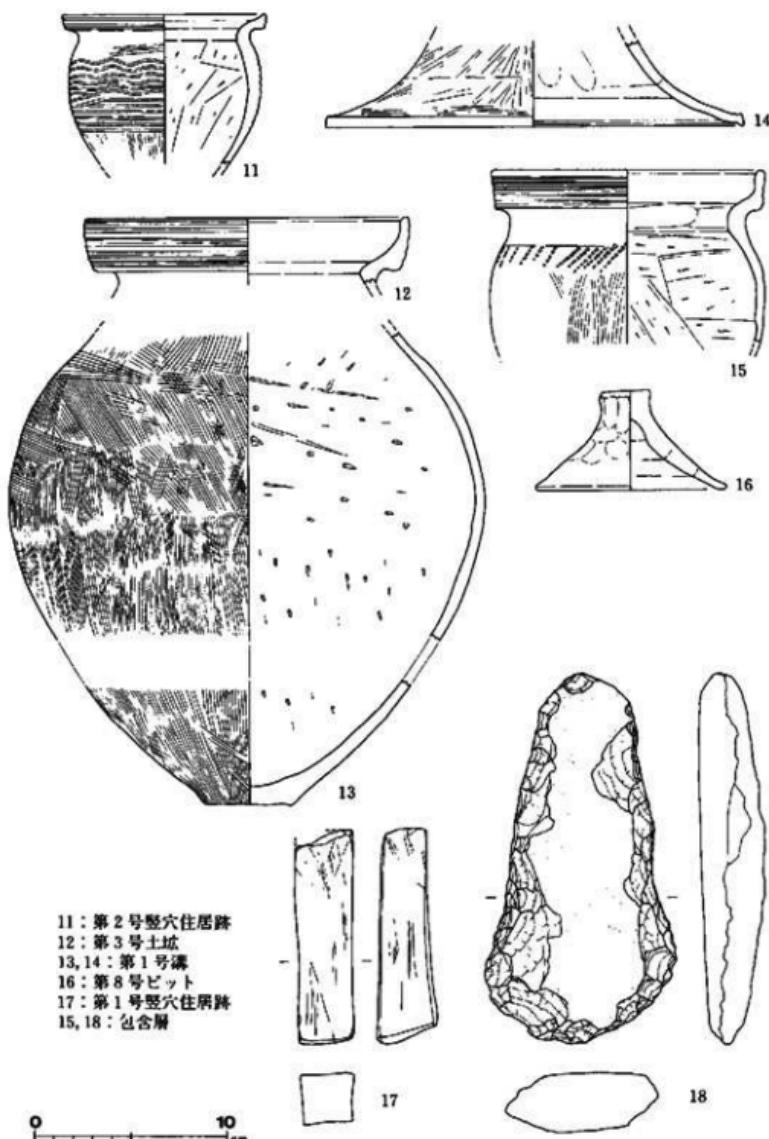
5号Pit実測図(4・5区)

第17図 平木D造跡造構実測図2 (S = 1 / 80)



1~10：第1号整穴住居跡

第18图 平木D遺跡出土遺物1 (S=1/3)



第10図 平木D遺跡出土遺物2 (S = 1/3)

第5章 平木A遺跡の発掘調査（平成3年度）

第1節 調査の概要

平木A遺跡では幅2m、総延長約70mの東西に細長く伸びる排水路設置区域が調査の対象となった。調査に当たっては排水路のセンターを調査区の主軸とし、その東端で水路が折れ曲がる屈曲点を起点(0m)とした。そして起点から西に向かって10mごとに小区を設定し順に1区、2区、3区…と、7区までふった。主軸は東西方向に沿っている。調査の結果、平木A遺跡では溝3条を検出した。出土遺物は若干の土器小片があるが図化に耐えるものではない。

第2節 微地形と層序

平木遺跡群の立地する手取川扇状地扇端部は大小の水系で解析されており、旧地形は割に激しい起伏を有する。集落は古来よりその中の防護形の微高地や海浜部の砂丘後背地などの居住適地に立地することが多く、現在の平木町集落もまた、平木A遺跡と重複しながら周辺よりやや高まる微高地の一角に立地していることは現状の等高線から窺う微地形から推定される。

調査区の壁面から観察された平木A遺跡の土層堆積は第21図に示した通りである。上から耕作土（第21図1層）、旧耕作土（2）、その下は黄褐色粘土層（3）で（2）の床土もしくは間層であろう。その下は濃灰色粘土層（4）であり、土器が少量含まれ、遺物包含層と推定できる。層厚は10~20cmを測るが、6区以西では確認されない。その下の濃明黄灰色粘土層（5）が一応の遺跡のベースと捉えられ、その上面すなわち遺構面は標高10.4m前後を測る。これより下層は部分的なたち割りで確認したものであるが、（5）の層厚はどの地点でも概ね20cm程度であり、その下層にあらわれる砂質土層を基盤土壤とするものと考えられる。以上のように各区ではほぼ共通した土層の堆積状況であるが、6区以西でベース面の標高が上がっているのに反して包含層が消失しており、遺跡の西側に関しては後世の削平が及んでいる可能性には注意しておきたい。

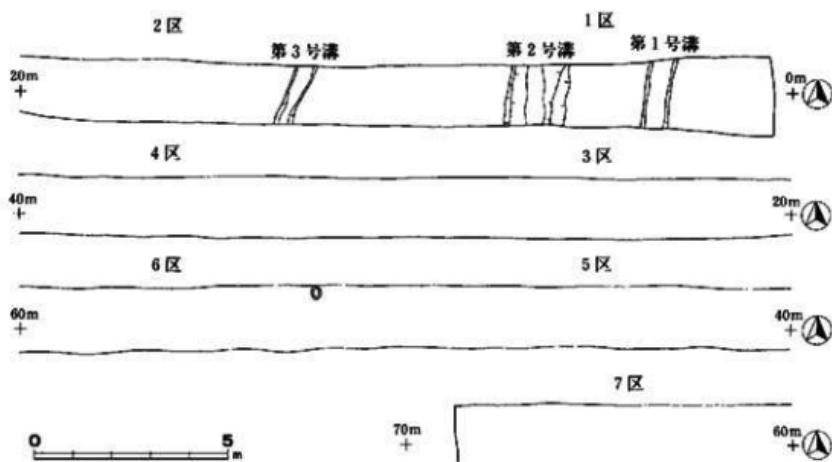
第3節 遺構と遺物

第1号溝（第22図）

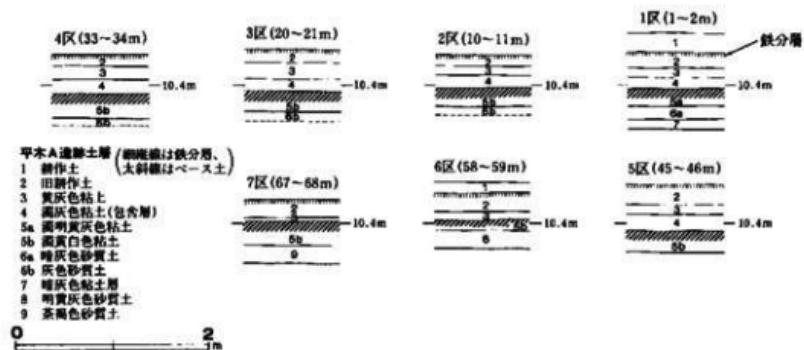
1区（3~4m地点）に位置する。ほぼ南北方向に直線的に走る幅約70cmの溝である。深さは16cmほどであるが、比較的しっかりと掘り込まれており、底面はおおむね平坦である。覆土は包含層と同質の単層である。出土遺物は時期不明の土器の小破片のみである。

第2号溝（第22図）

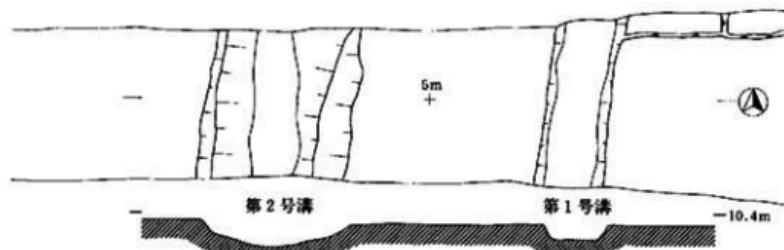
1区（6~7m地点）、第2号溝の西2mに位置する。ほぼ南北方向に直線的に走る、幅約1.6mを測る大溝である。掘り込みは検出面より上位から確認され、2段掘りの形をとるが整ったも



第20図 平木A遺跡調査区全体図 ($S = 1/150$)



第21図 平木A遺跡土層断面図 ($S = 1/60$)



第22図 平木A遺跡主要遺構実測図 ($S = 1/60$)

のではなく、底面にもやや凹凸がある。深さは検出面からは約25cm、2段目の掘り込みからは8～13cmを測る。覆土は灰色粘土の単層である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器があるが、いずれも図化できない小破片である。この遺構は、掘り込みと覆土から、中世以降の時期に帰属するものと判断される。出土した遺物は中世以降に流れ込んだものであろう。中世以降の遺構面自体はすでに後世の耕地整理などで削平されてしまったものと考えられる。

第3号溝

2区（13m地点）に位置する。南南西から北北東に走る溝であり、幅40～50cm、深さ4～6cmを測る。覆土は包含層と同質の単層である。遺物は出土しなかった。覆土は第1号溝と同じであり、より高所の西側に位置したため、後世の削平をより強く受け、このように浅くやや細い遺構に見えている可能性が高い。

第4節 小 結

平木A遺跡の調査区で得られた遺構・遺物はきわめて少なく、その遺構の全形や時期などは不明確であるが、分布調査および第1次調査の成果とあわせて考えるならば、遺跡の中心は現在の集落から北方にかけてあり、今回の調査区は南の縁辺部に相当するものと推定できよう。



北安田町

0 100m

第23図 平成3年度調査区位置図 ($S = 1/3,000$)

第6章 平木B遺跡の発掘調査（平成3年度）

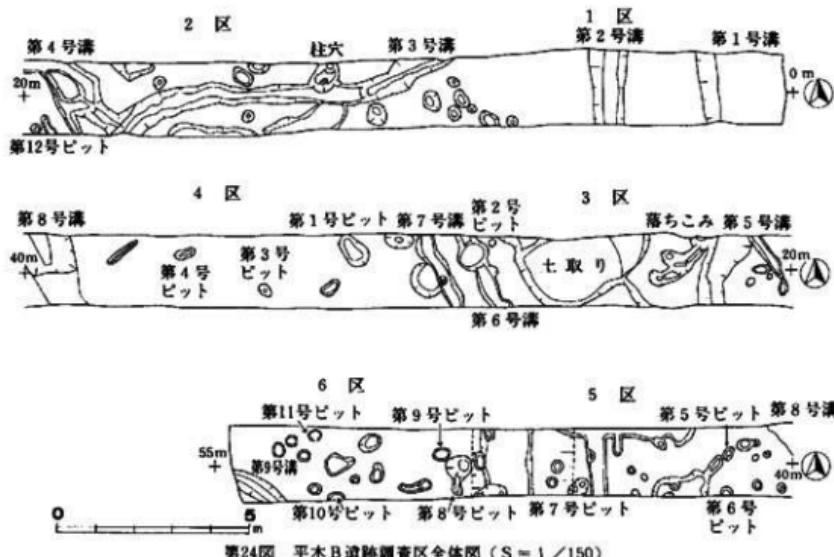
第1節 調査の概要

平木B遺跡では幅2m、総延長約50mの東西に細長く伸びる排水路設置区域が調査の対象となった。調査に当たっては排水路のセンターを調査区の主軸とし、その東端で水路が折れ曲がる屈曲点を起点(0m)とした。そして西に向かって10mごとに小区を設定し順に1区、2区、3区…と6区まであった。主軸は両調査区とも東西方向に沿っている。平木B遺跡の調査区は、その中央部に削平を受けているようであるが、他に3区に土取り穴、5区に旧用水路の痕跡が確認され、あわせて後世に受けた擾乱としてあげておきたい。

調査の結果、柱穴1基、溝9条、落ちこみ1基、遺物を出土したピット12穴を検出した。出土遺物は弥生土器が主で他に土師器・須恵器・陶磁器が若干ある。また、調査区外であるが周辺で須恵器を多く表面採集しており、平木B遺跡の分布範囲にあるものと考えられる。

第2節 微地形と層序

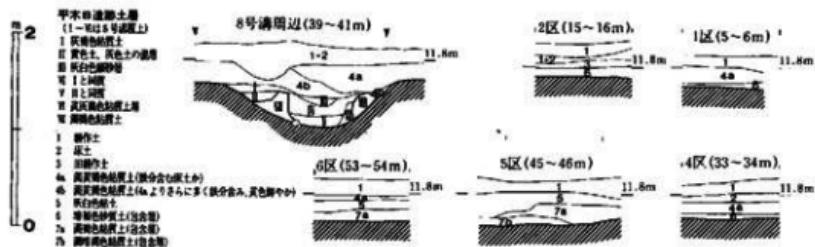
平木B遺跡は同A遺跡の南方約500mの、より扇央部寄りに位置するため、標高は現在の地表で比較して約1m高くなっている。平木遺跡群が立地する手取川扇状地扇端部に通有の紡錘形の



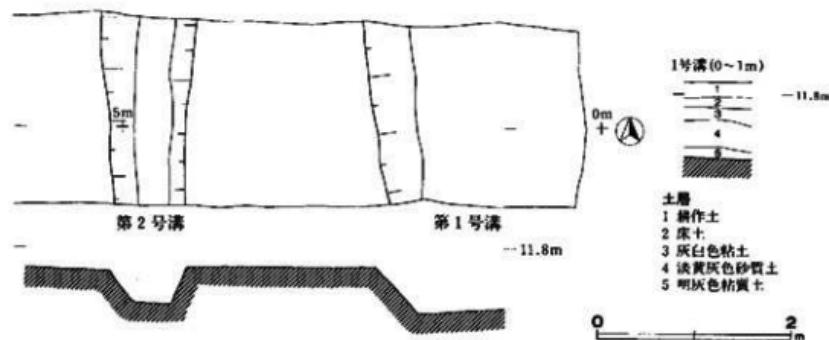
第24図 平木B遺跡調査区全体図 (S = 1/150)

微高地は、より微視的に見るとその中にもさらに起伏があり、細かく解釈されていることがわかる。逆に、そうした小規模な微高地が小水系毎に群となって生活遺地をブロック的に形成しているとも言えよう。平木B遺跡の立地は基本的に同A遺跡と同一微高地内に立地しているが、遺跡の分布と現在の等高線からは、その中でも別々の高まりの上にあるものと推定される。

平木B遺跡の土層堆積は第25図に示した通りである。基本的には上層から耕作土（第25図1層）、その床土（2）、包含層（6・7）、ベース土となる。1・2層は混層となって明確に分層されない地点も多い。1区および2区では旧耕作土（3）とその床土（4）が部分的に確認された。（4）については鉄分が沈着する地点としない地点があり、前者がほとんどである。包含層は濁った褐色の色調で、東の1区・2区では砂質土、4区～6区では粘質土となる。2区の一部および3区では包含層は確認されないが、この区間のベース面のレベルが他区より若干高く、遺構・遺物の分布ももっとも密であることから、本来は存在した包含層が後世に削平されたものと考えられる。ベース土はやや濁った暗黃灰色粘砂であり、下位ほど濁りが少なくなる。人力による深さ数十cm程度のたわらでは貫通することができず、かなり厚く堆積しているようである。



第25図 平木B遺跡土層断面図 (S = 1/60)



第26図 平木B遺跡主要遺構実測図(I) (S = 1/60)

第3節 遺構と遺物

柱穴(第27図)

2区(12m)に位置する。遺構の北半は調査区外へ出ており、また南部では3号溝と重複しているため、その平面形は不明確である。壁面で観察された土層と断面形から柱穴と判断した。柱は抜き取ったのか腐食したのか判断しがたいが、遺存してはいない。現状では短幅64cm、検出面からの深さ65cmが測定される。覆土は5層、Ⅲ・IV・V・VII・VIIIである。うち、V・VIIはベース質土であるが、Vは掘り方への埋め土、VIIはベース土の崩壊土であろうか。IV・VIIは褐色の有機物層であり、遺物を主に含んでいる。VIIIは遺構がある程度埋まつたのち時間をおいて堆積した層であろう。遺物は土器小破片が出土しており、その中には古代の土師器甕が含まれている。

第1号溝

1区(0~2m)に位置する。南北に直線的に走る溝の西半の立ち上がりと底面を検出したが、深く規模も大きい遺構であり、全幅はせず調査区の南西隅をコーナー上に掘り残した。両端を確認できなかった現状でも幅は2.2mを測る大溝であり、検出面からの深さは最大で54cmを測る。検出面よりも上位からしっかり掘り込まれ、底面は平坦である。覆土は3層で、上から灰白色粘土、淡黄灰色砂質土、明灰色粘質土である。遺物は弥生土器破片・陶磁器破片が出土したが図示できない。覆土と出土遺物から、中近世以降の用水か小河川と判断される。

第2号溝

1区(4~5m)に位置する。南北に直線的に走る溝であり、掘り込みは急ではほぼ垂直に立ち上げる。幅は75cm~1m、深さは最大で40cmを測る。覆土は1層、灰褐色砂質土で、包含層よりも明るい色調である。遺物は弥生土器・古代の土師器・須恵器の破片が出土している。

第3号溝(第27図、出土遺物第28図)

1区から2区(9~18m)にかけて位置する。他遺構との複合が著しいが、溝の本筋は南西・北東方向に抜けていくようであり、やや蛇行してほぼ東西方向に振る部分を調査区内で捉えたものであろう。12m付近では北岸で柱穴と、南岸で浅い窪みとそれぞれ複合し、18m付近では第4号溝と複合しているが先後関係は不明である。深くしっかりと断面U字形に掘り込んでおり、幅は14m付近がもっとも狭く38cmを測るが、それ以外の地点では70cm前後が平均的な値である。深さは南西部から20cm前後で推移してくるが11m地点で底面に段が付いて深くなりそれより北東では40cm前後を測る。覆土は基本的に3種で、暗く濁った褐色の粘質土の有機物層Ⅳ・V、ベース土が主成分で崩壊土とみられるV・VI、遺構がある程度埋まってから時間をおいて堆積したらしいI・IIIである。断面図は壁面から観察されたもので、主軸に直行していないため西側の方が広がっている。Iは他層を明確に切っており、さらに新しい時期の溝が重複しているようである。遺物は覆土から弥生土器・古代の土師器・須恵器破片が出土し、うち1点を図化した。第28図11は弥生土器の甕であり、直立する有段口縁に擬回線を施している。

第4号溝

2区(18~20m)に位置する数状の溝を指す。複数の遺構が重複しているようであるが、明確

に区別することはできなかった。ただ、遺構底面の所見からは、東西方向から南へ曲がる溝が北に、南東・北西方向に走る溝が南東にそれぞれ所在し切り合っていると推定され、さらに両者より細い溝や第3号溝と切り合うようである。遺構の西部は不明確で、隣接する5号溝や落ちこみとの関係はわからない。最東の溝及び最北の溝は幅40~50cm、最東の溝の西に並走する溝はより細く幅20cm前後、深さは全体的に10~13cmを測る。覆土は1層で褐色粘質土であり、柱穴や第3号溝にはほぼ共通する。遺物は弥生土器破片が出土している。

第5号溝

3区(20~21m)に位置する。南東・北西方向に走り、南端は完結するが、北端は調査区外へ伸びている。落ちこみと近接し、調査区外北部では重複しているようである。幅は平均的な値で30cmを測る。深さは南側が深いが、それでも10cm程度であり、全体的に浅い遺構である。遺物は弥生土器破片が出土している。

第6号溝

3区(28m)に位置する。南東・北西方向に伸びており、第7号溝と並走している。全体的な形状はやや不整な印象を受け、北部ではやや大型のピットと重複しているようである。遺構の幅・深さの最大値はこの場所で測られ、幅85cm、深さ25cm前後となるが、それはピットに帰属する値と思われる。遺構の平均的な幅は約40cm、深さは約10cmである。遺物は出土していない。

第7号溝

3区(29m)に位置する。南東・北西方向に伸びており、第8号溝と並走している。主軸線付近で径90cm前後と推定されるやや大型のピットと重複し、切っている。幅40~50cm、深さ25~30cmを測る。底面には深さ約10cmの小穴が確認される。遺物は出土していない。

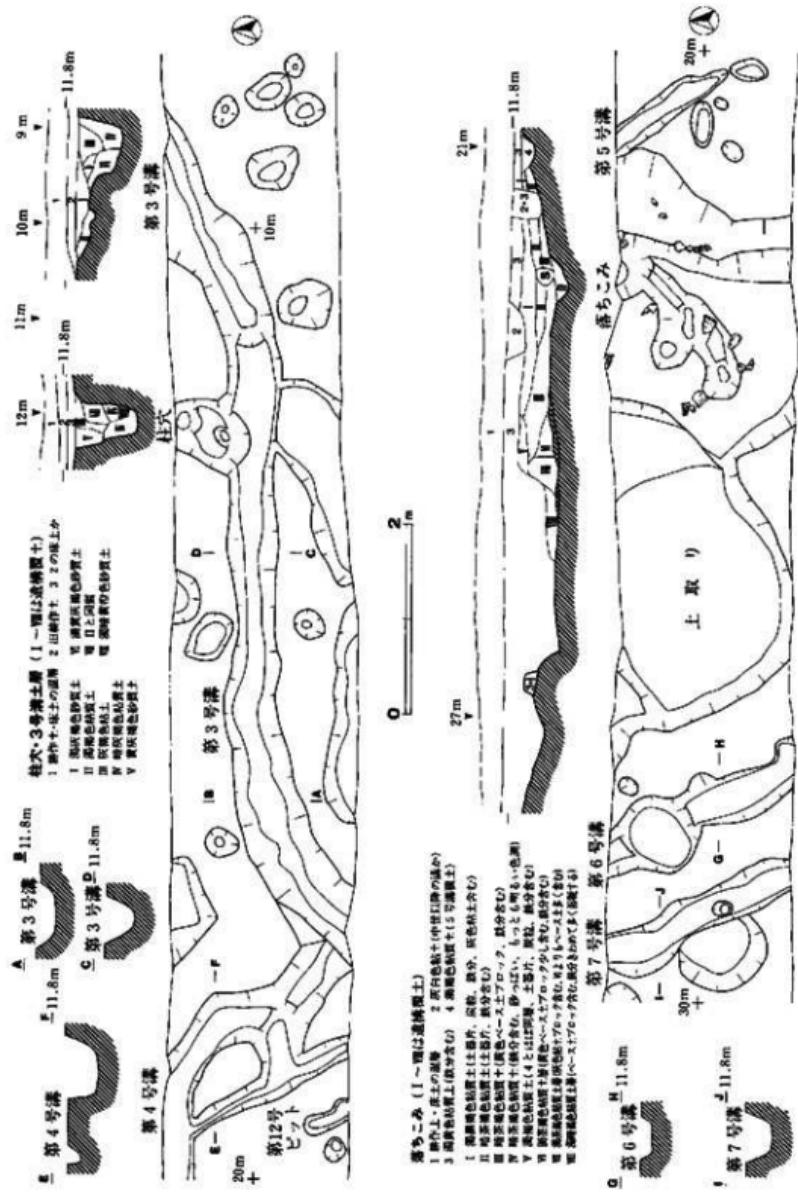
第8号溝(出土遺物第30図)

4区(39m)に位置する。遺構自体は南東・北西方向に走る大溝1条と、そのプラン内に重複してほぼ同じ方向に走る新期の溝2条からなる。北半部のみを充堀した。大溝は開き気味のU字状断面を呈し、最大幅1.5m、深さ45cmを測る。重複する新期の溝は大溝の西端部と中央部に位置し、土層断面から確認した規模は前者が幅75cm・深さ17cmと浅く、後者が幅78cm・深さ30cmと深いものである。新期の溝2条の新古関係はわからない。覆土は7層に分層されるが、大溝の本来の覆土はⅦの1層のみが残る。I・IIとIV・Vはそれぞれ同質であり新期の溝の覆土となる。新期のより深いほうの溝にみられるⅢは遺構がほぼ埋まってからの最後の流砂層、VIはベースの崩壊土であろう。遺構の時期は、覆土から判断して大溝が古代以前、新期の溝は中世以降であろう。遺物は弥生土器破片、古代の土師器、須恵器が出土した。第30図1は須恵器壺蓋である。口縁部はわずかに折れ曲がっており、端部は断面三角形状におさめて面を取っている。

第9号溝

調査区の西端の南隅、6区(54m)に位置する。南東・北西方向に走り、南端は調査区南壁外へ、北端は西壁外へ伸びており、検出した部分は小さい。現状で、幅約50cm、深さ約30cmを測る。覆土は包含層と同質である。遺物は出土していない。

第27図 平木B道路主要道路実測図(2) ($S = 1/60$)



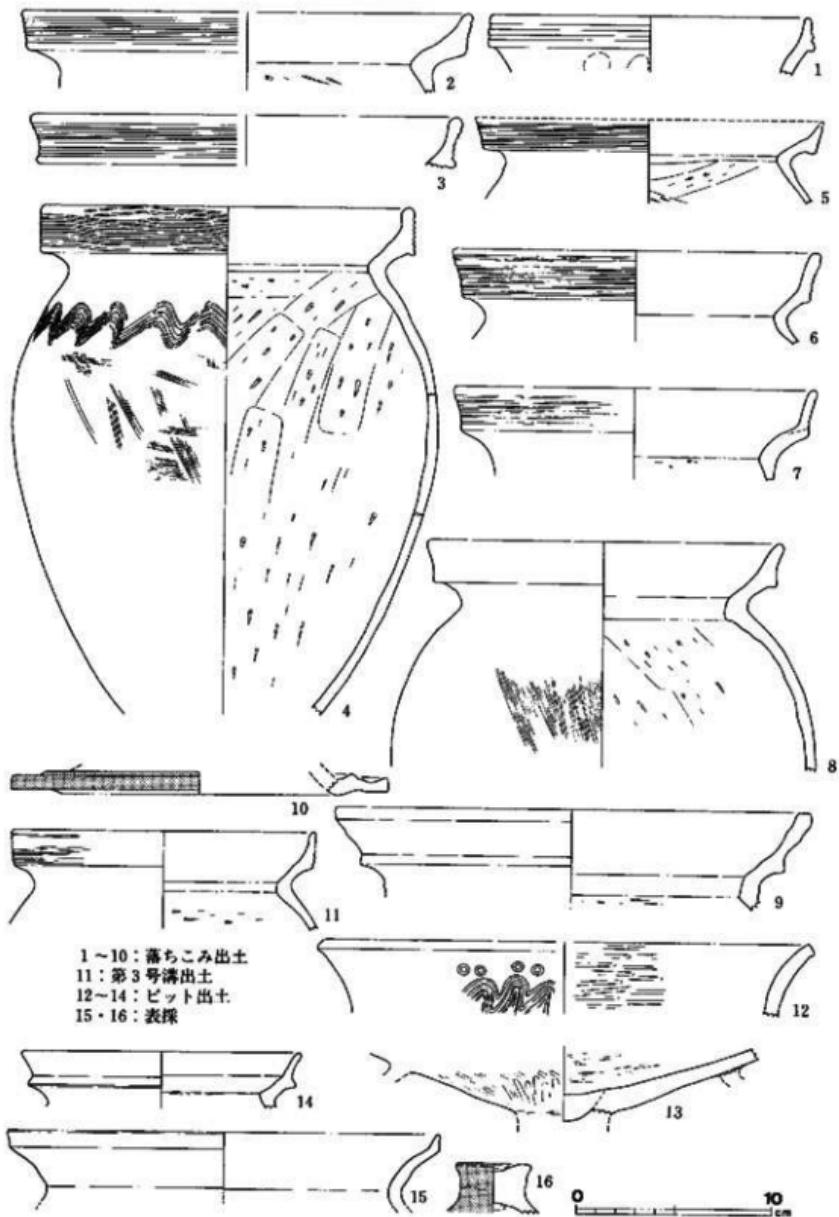
落ちこみ（第27図）

3区、21mから25m前後にかけて位置するようであるが、検出したのは遺構の一部分のみである。遺存が良好なのは東部で、比較的ゆるやかな傾斜の掘り込みが確認され、第5号溝に切られる。西部は近現代の土取りにより擾乱を受けており、遺構の範囲が捉えにくくなっている。遺構の南西部にわずかに同様の立ち上がりが確認されており、東部の掘り込みと対応するものと推定できよう。遺構の南北に至っては調査区外へ出ており、全形は窺うべくもない。底面は浅い凹みがいくつか確認される程度で概ね平坦であるが、東から西へ向かってゆるやかに低くなっているようである。壁面から土層の堆積を確認したが、遺構覆土はⅠ～Ⅳ、Ⅵ～Ⅷでいずれも褐色の有機物含みの粘質土を基本として生じた土層である。Ⅴはこの遺構を切っている新期の溝の覆土である。Ⅰがもっとも黒色に近くて腐りが強い、包含層に近い質である。Ⅳは底面のピット状の凹みの覆土である。Ⅷは土取り後の埋土の影響を受けてやや変質し、かつ溶脱した鉄分が沈着したものとみた。遺物を含む層はⅡとⅢであり、弥生土器と台石・打製石斧などの可能性を持つ石、緑色凝灰岩の玉原石・剥片が出土しているが、当然床面から浮いた状況を呈していた。

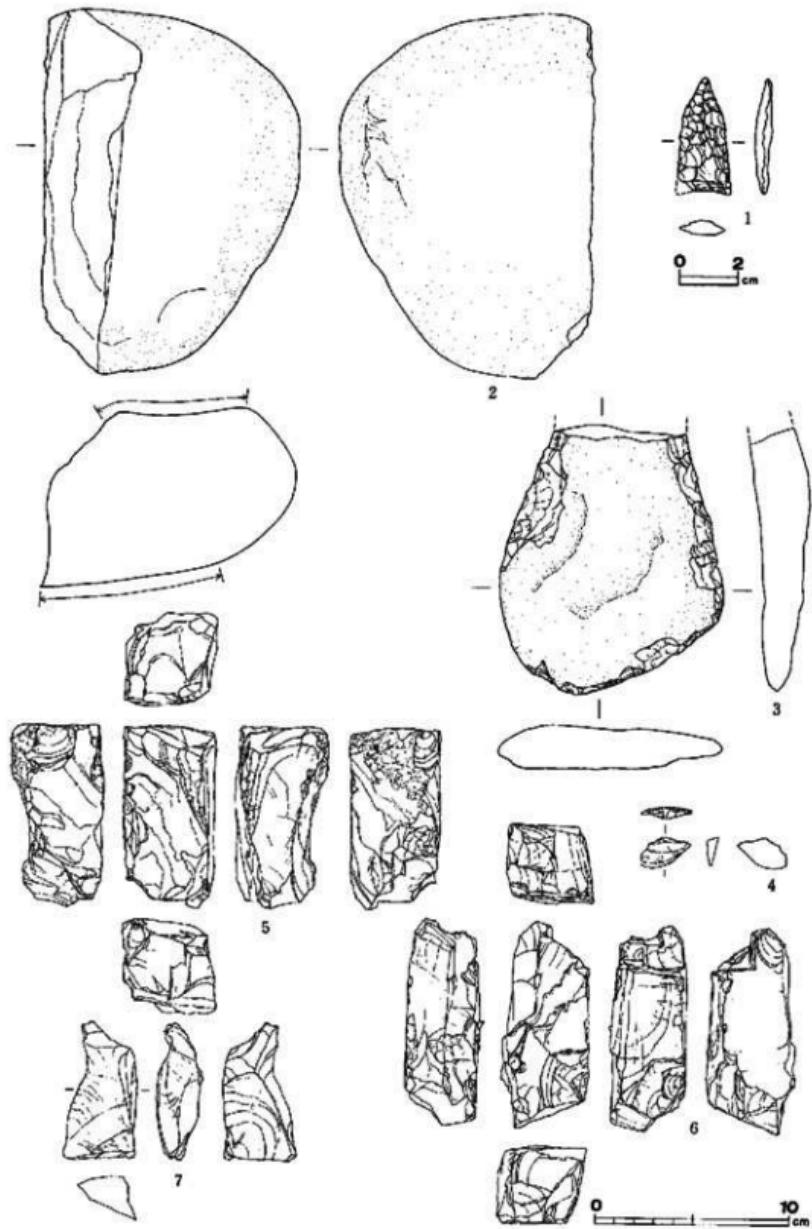
この遺構の性格については、幅の限られた調査区に加えて著しい擾乱を受けており現状では何ともいえないが、水流等の痕跡や湿地堆積的な状況が見られないため、自然地形や大溝・小河川といった類いのものではあるまい。土層ではⅡ・ⅢとⅥ・Ⅶが切りあいをもって前群が後群を切っているように観察され、住居の建て替えや溝さらいといった遺構の改修行為を推定することも可能である。また、出土した土器・石器が時期的・位置的にまとまっており、遺物が容易に流れ込むような遺構ではないともいえる。以上の所見からはあまり恒常的な水流を要しない溝、もしくは堅穴住居跡等の性格が想定されるが、これ以上の深い追求は不可能であろう。遺構の時期については、覆土が他の古代の遺構とやや異なることと出土土器から、弥生後期と判断される。

落ちこみ出土遺物（第28図1～10、第29図2～7）

第28図1～10はすべて弥生土器である。1～9は甌であり、すべて有段の口縁形状を呈する。1は口縁帯に2条の凹線が施される弥生後期でも古い系譜を引く。頸部は現存するよりやや伸びようがあり、広口の短頸甌となる可能性もある。2～7は多条化した凹線、いわゆる擬凹線を口縁帯に施す甌。2は短い口縁帯を持つ大型の甌で、厚手の作りである。胎土は大小の砂礫を多く含んでいる。3は有段の口縁帯部分のみが遺存する。口縁帯は中位が薄くへこんでやや外反気味の器型で、端部は厚く丸めておさめている。4は出土遺物中もっとも遺存が良く、全形を知りうる唯一の品である。器高に比して口径・頸部の括れ・胴部の張りが小さく、胴部最大径が中位よりやや上にあるため、細身で重心が高くかつ起伏が少ないスタイルとなる。全体に厚手の作りである。口縁帯は直線的でやや内傾気味である。胴部外面には、粗いハケのわずかな痕跡と、それを消している浅く細かい条を全面で観察でき、ハケ調整のち平滑な板条具で丁寧になされたものと判断される。胴部内面のヘラケズリ調整は頸部近くで横方向になるほかは一貫して縦方向もしくはやや斜めに下から上へ行っている。頸部の梯階波状文は連続して一度に引かれたものではなく、波が1回上下するごとに引き継いでいる。擬凹線と比較するとやや条が太いものの凹凸の感じは似ており、同一の原体による可能性もある。5は外傾する短い口縁帯で、端部は欠損し



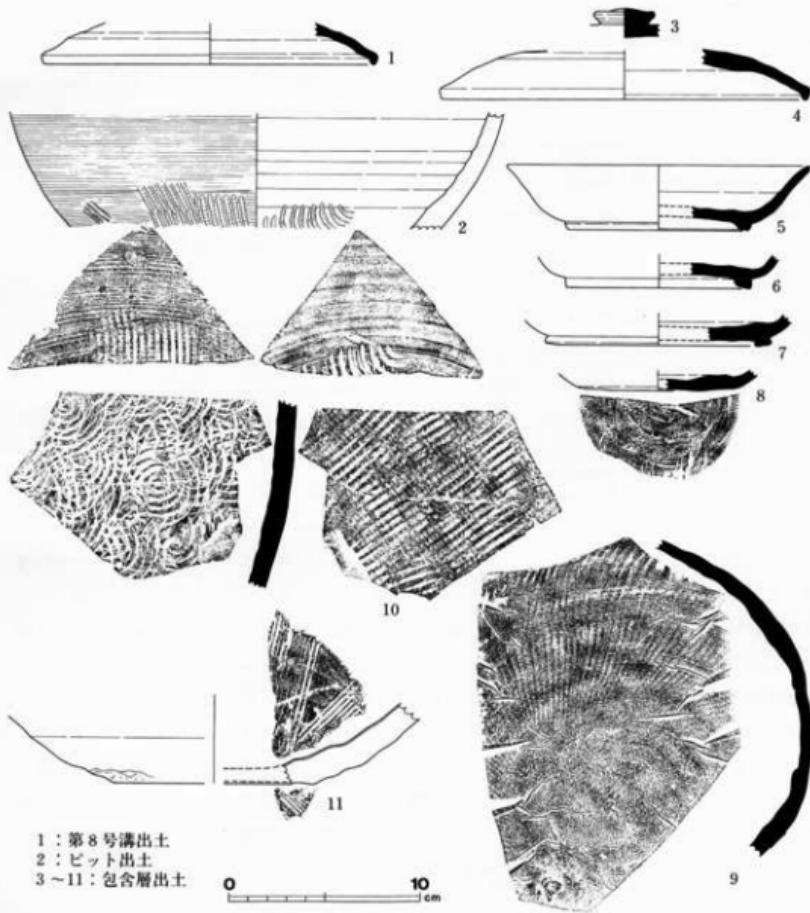
第28図 平木B遺跡出土弥生土器実測図 (S=1/3)



第29図 平木B遺跡出土石器類実測図 (S = 1/2, 1/3)

ているがおそらく先細りであろう。胸部は比較的薄手になるようである。6・7はやや摩滅しており、灰白色系の色調を呈し、胎土に比較的大粒の礫を含んでいる。7については擬凹線が明確でない。8・9は無文の口縁帯の甕。8は短い口縁帯の中位が凹んでおり、外反気味になっている。9は大型品で、口縁帯の端部と段部は厚く、その中間は薄く仕上げている。全体的に厚手であるが、稜が明確でメリハリの利いた器型である。胎土は一般的な礫の他に細かい砂粒が含まれるようであり、器面に浮き出ている。10は高壺の脚部である。端部は接地したあと折り返され、さらに水平方向に拡張されている。やや摩滅しているが、面取りと稜ははっきりしている。赤彩は端部にのみ痕跡が残っていたものであり、部分的に塗り分けられていた可能性もある。

第29図 2～7は石器・石製品である。2は台石か。約半分が欠けている。安置すると平滑な凹



1：第8号溝出土

2：ピット出土

3～11：包含層出土

第30図 平木B遺跡出土土器・須恵器他実測図(1) (S = 1 / 3)

面と凸面が表裏をなすが、凹面を上にした台としての使用を考えるのがもっとも自然であろう。3は打製石斧であろう。頭部を欠くがかなり大型の品と推定する。原石から素材を剥離させ、刃縁部と剥離面のみを調整し、もう片面が自然面のまま残る一般的な製作法によるものである。4～7は緑色凝灰岩の原石であり、玉製品の素材となるものである。4は小型の剥邊である。菅玉等の原形である角柱状を呈しないことから、角柱の製作で生じたチップであろう。5・6は大まかな角柱状を呈し、これからさらに細かく分割していく段階にあるもの。ただし、6はすでにブロック的に小角柱を剥離させているようである。7は角柱状を呈しておらず、風化が著しい。

ピット（出土遺物第28・29・30図）

遺物を出土したピットに遺構番号を振った。第1～12号ピットまでを数える。いずれも小規模であり、深いものや形の整ったものはない。第1号ピットは4区(31m)に、第2号ピットは3区(28m)に、第3号ピットは4区(34m)に、第4号ピットは4区(36m)に、第5・6号ピットは5区(42m)に、第7号ピットは5区(45m)に、第8・9号ピットは5区(49m)に、第10・11号ピットは6区(52m)に、第12号ピットは2区(19m)にそれぞれ位置する。遺物は第1・2・4・6～12号ピットからは弥生土器破片が出土している。第3号ピットからは石鏃が出土している。第5号ピットからは古代の土師器破片が出土している。

第28図12～14はピット出土の弥生土器である。12は第1号ピット出土の高坏である。坏口縁部であり、外反して開き端部は面を取る。外面は端部直下に竹管文とその下に櫛波状文を巡らしている。竹管文は並んで4個確認されたが中間が空いており、2個以上1単位でまとまっているようである。波状文は波の下部で引き継ぎが見られる。13は第8号ピット出土の高坏である。坏底部であり、環状の把手が剥離した痕跡がある。14は第11号ピット出土の甕である。小型の品で有段口縁を呈し、口縁帯は中凹みで外反気味である。有段部・頸部内面の屈曲が脱い。第29図1は第3号ピット出土の石鏃である。平基無茎鏃であり、平面形二等辺三角形の下端の一方を欠損している。第30図2は第5号ピット出土の土師器の長胴甕である。底に近い部分であり、下位に平行タタキ・同心円文が見られる。堅緻な酸化焼成を呈し、態度は精良であり須恵器甕とは識別できる。

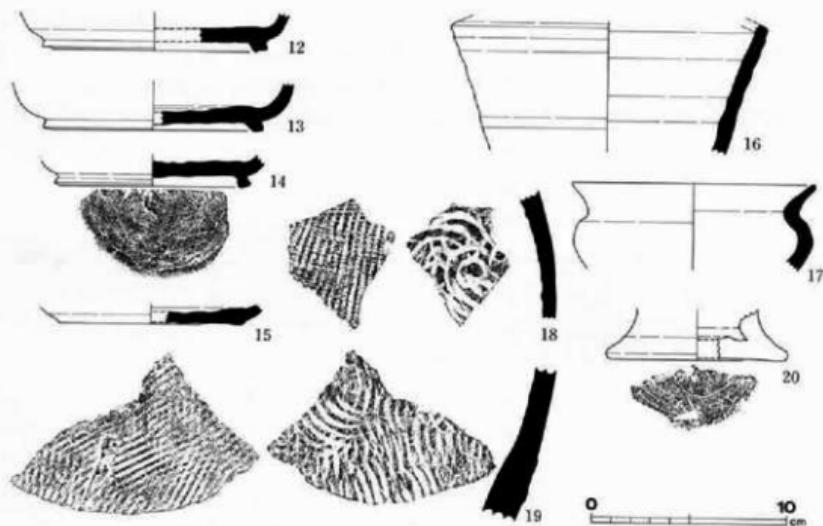
包含層出土遺物（第30図3～11）

第30図3～10は古代の須恵器。3・4は坏蓋である。3は偏平なボタン状のつまみ部のみが遺存している。4はゆるやかに伸びる口縁部で、端は軽く内面に折り返して面を取っている。5～7是有台坏である。5は器形が窓える唯一例。口縁の外傾度が大きい浅身の品であり、高台も偏平なものが付いている。6・7は底部である。どちらも幅が広くしっかりした偏平な高台が付く。6の高台は外端が接地するようである。8は無台坏の底部である。外底面にはヘラの切り込みが観察され、ヘラ記号も存在するものと思われる。9は横瓶の胴部、樽状に張り出す部分であり、粘土板による外側からの閉塞が観察される。その周辺には溶着痕と無降灰部位が観察され、横転倒立させて他の器種もしくは焼き台と重ねて安置するような焼成時の状況を想像できる。10は甕胴部である。酸化焼成を受けて暗赤褐色を呈しているが、胎土に第30図2などより砂礫が多く含まれ、また万遍なく入るタタキ調整から須恵器と判断した。内面の同心円文は条に内面の木目が直行しており、同心円文に類と考えられる¹。11は珠洲焼の片口鉢である。底部付近しか遺存し

ていないが、丸みをもって胴部へ立ち上がる器形と、12条程の直線的なおろし目から、珠洲Ⅲ期（13世紀後半）ぐらいの時期に位置付けられる²。

表面採集遺物（第28図15・16、第31図）

以下は、調査区の周辺で採集された遺物である。第28図15・16は弥生土器である。15は壺で、ゆるやかに外反する口縁の端部を弱く立ち上げている。16は蓋でつまみ部のみ遺存している。外面は赤彩している。第31図12～19は古代の須恵器である。12～14は有台杯で、いずれも底部である。12は厚みのある比較的しっかりした高台がつく。全体に砂っぽい質感を有し、他品とは異なった印象を与える。14は外底面に爪状の圧痕が円形に二重に巡っている。製作時の調整であろうか。また、焼けて黒色になった砂蹠が器面に浮き出でており、全体に暗めの色調とも合わせて特徴的な質感と言える。15は無台杯の底部である。口縁部の外傾が大きい浅身の器形と推定する。16は瓶類の胴部であろう。上位は肩部に至る屈曲部分で欠けている。17は小型壺である。短い外反気味の口縁部は先細りとなっておさまる。18・19は壺洞部であり、外面平行タタキ、内面同心円文が入る。18は外面平行線文a類、内面は條に沿った木目が部分的に入り同心円文b類状となる¹。19は底に近い部位である。下位に溶着痕が見られる。20は陶器、瀬戸の花瓶の底部である。外面は淡黄褐色の釉薬がかかるが、剥離が著しくまだら状になっている。胎土・色調・形態などから、14世紀後半から15世紀初頭の年代が与えられる品である。



第31図 平木B遺跡出土土師器・須恵器他実測図(2) (S=1/3)

第4節 小 結

平木B遺跡の発掘調査で得られた遺構については、落ち込みを除いては出土遺物が少なく、時期を限定するのは難しい。第3号溝・柱穴に関しては出土遺物から奈良時代、8世紀代に属するものと推定できる。その他の大半の遺構も同質の覆土を有しており、ほぼ同時期のものであろう。弥生時代の遺構は落ちこみ以外では確定なものはない。弥生土器はこの他の遺構からも少量出土しているが、いずれも摩滅しており、埋土に混入したものと考えたい。

出土遺物は弥生土器と、古代の土師器・須恵器に大別される。弥生土器については落ちこみからまとまった出土があり、各器種の特徴から、弥生時代後期後半、法仏式に位置付けることができる。その他の弥生土器についてもこの範疇におさまるものとして特に矛盾はないよう感じられる。平木B遺跡の弥生時代の主体的時期といえよう。古代については、遺構に伴うものが少ないと、時期幅はあまりなく、包含層資料は8世紀前半を中心時期とする。表探資料にはやや後出的な要素も見られるが、それでも9世紀代に降るものはほとんどないとみたい。この年代観から、8世紀代が平木B遺跡の古代の中心時期となる可能性が高い。胎土觀察から推定した須恵器の産地は、南加賀窯が主で、能美窯か河北窯が含まれるようであるが、両者の識別は非常に困難であるため、その配分等は明らかにしえなかつた。その中で、第31図12に関してはきわめて精緻な質感と胎土から金沢の末窯の産の可能性がある。当地の8世紀代の消費遺跡における須恵器については、近接する北安田北遺跡で南加賀窯を須恵器の主要供給源とし、河北窯・能美窯が副次的に補完するというあり方が示されている³。平木B遺跡では、今回確認された末窯産の可能性を持つ製品はわずか1点であり、基本的に北安田北遺跡の動向に共通するものであろう。

今回の調査の成果から、平木B遺跡は弥生時代後期後半と奈良時代が中心時期として確認された。弥生時代の平木B遺跡については、緑色凝灰岩原石・剝片の出土からは玉製品、おそらくは菅玉の生産を行っていた集落の存在が示唆されよう。弥生後期の玉生産に関しては実態は不明確ながら、加賀では比較的多くの集落遺跡で玉製品・未製品・原石等の存在が確認され、一般的の集落でもほぼ普遍的に玉生産が行われているものと推定されており、近接する平木A遺跡でも確認されている。平木B遺跡についても同様の理解がなされ、かつ近接する平木A遺跡が弥生時代後期終末を中心時期とする集落であることから、それに先行する集落遺跡となる可能性が高いものと考えたい。奈良時代の平木B遺跡については、近接する北安田北遺跡との関連が注目されよう。北安田北遺跡についてはこれまでに4次の発掘調査がなされており、7世紀から11世紀にかけて展開する当地の中核的な集落として位置付けられている³。集落は遺跡の範囲内でその中心を移動しているようであり、時期ごと・地点ごとに遺構・遺物の粗密が異なっている。その中で、第4次調査区は平木B遺跡に最も近接しておりかつ時期的にも重複する部分が多い。北安田北遺跡の範囲が既往の調査区にとどまらず北・東へ伸びるであろうことはすでに指摘されており³、平木B遺跡がその集落域の一部であるか、また別遺跡で分村的なものとなる可能性もある。平木B遺跡と北安田北遺跡の間の地区については分布調査の手が及んでいないため詳細は明らかにしないが、少なくとも両遺跡の強い関連は明らかであり、注意しておくべきであろう。

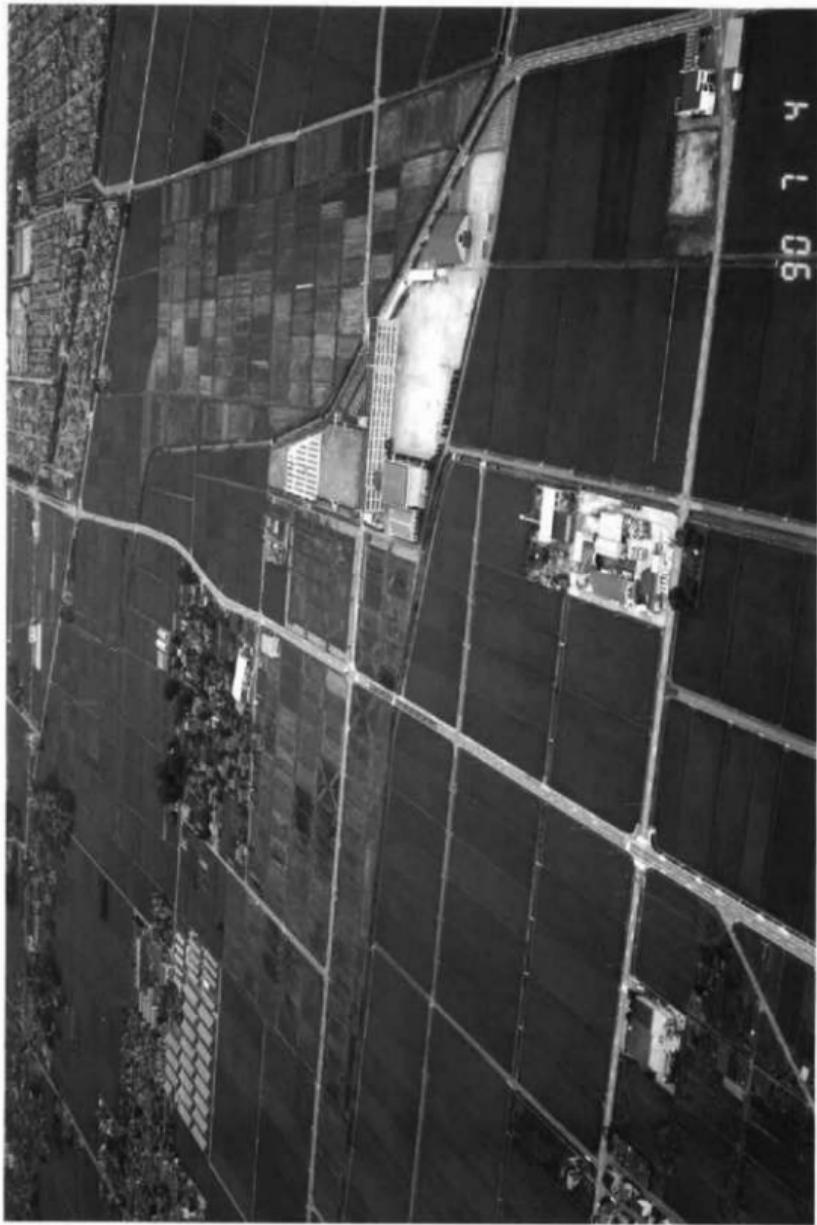
註

- (1)内堀信雄「第2節 叩き目文の原体同定」(辰口町教育委員会『辰口町湯屋古窯跡』1985年)での分類による。
- (2)珠洲焼資料館『珠洲の名陶』1989年の編年による。
- (3)松任市教育委員会『松任市北安田北遺跡IV』1992年

報告書抄録

ふりがな	ひらきいせきぐん							
書名	平木遺跡群							
副書名	県営は場整備事業御手洗・出城地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	垣内光次郎、安英樹、富田和氣夫							
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒921 石川県金沢市米泉町4丁目133番地							
発行年月日	1994年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 道路番号	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
ひらき 平木A遺跡	まつとうし ひらきまち 松任市平木町	17208	08076	36° 31' 50"	136° 32' 50"	19900821 ~ 19901020	300	県営は場 整備
ひらき 平木B遺跡	同上	17208	08077	36° 31' 50"	136° 32' 40"	19900821 ~ 19901020	150	同上
ひらき 平木D遺跡	同上	17208	08079	36° 31' 30"	136° 33' 0"	19911105 ~ 19911127	240	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
平木A遺跡	集落	弥生時代 後期	竪穴住居跡3、溝、土坑			弥生土器、砥石、管玉、 管玉未製品		
平木B遺跡	集落	弥生時代 後期	溝、ビット			弥生土器、台石、打製石 斧、緑色凝灰岩原石		
		古代	溝、柱穴、ビット			須恵器、土師器		
平木D遺跡	集落	弥生時代 後期	竪穴住居跡2、溝、土坑			弥生土器、打製石斧		

写真図版1



平木漁港群海岸（北から）

90 7 4

写真図版2 平木A遺跡（平成2年度）



調査区東半部全景（西から）



調査区西半部全景（東から）



第1号住居跡全景（東から）



第1号住居跡全景（西から）

写真図版 4 平木 A 道跡（平成 2 年度）



第 1 号住居跡の集石（東から）



第 1 号住居跡東壁際の土層断面



第2号住居跡・第8号土坑全景（西から）



第2号住居跡・第8号土坑全景（東から）

写真図版 6
平木 A 遺跡（平成 2 年度）



第 3 号住居跡全景（西から）



第 3 号住居跡炉跡（北から）



第3号住居跡と第1号土坑（南東から）



第3号住居跡東壁際の土層断面



第 1 号土坑土層断面（南から）



第 1 号土坑完成面状況（南から）



第8号土坑全景（西から）



第1号溝（西から）

写真図版 10

平木A遺跡（平成2年度）

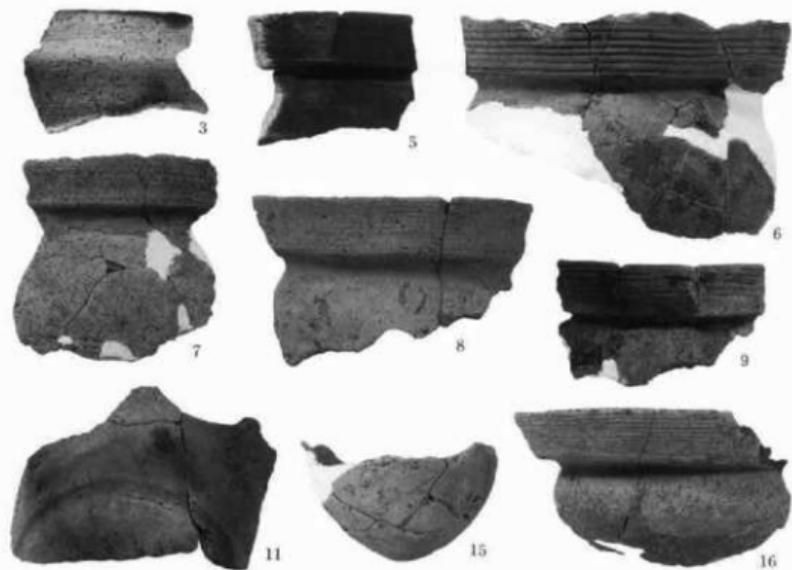


10区の溝と土坑群（東から）

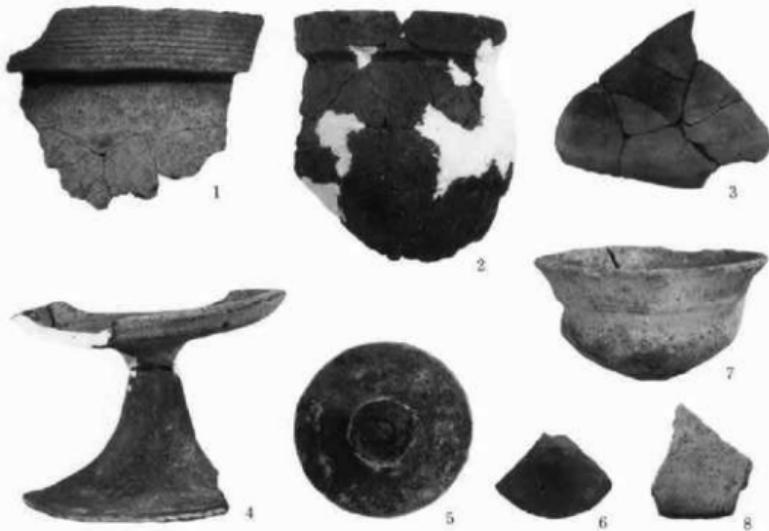


調査風景（西から）

写真図版 11 平木 A 遺跡（平成 2 年度）

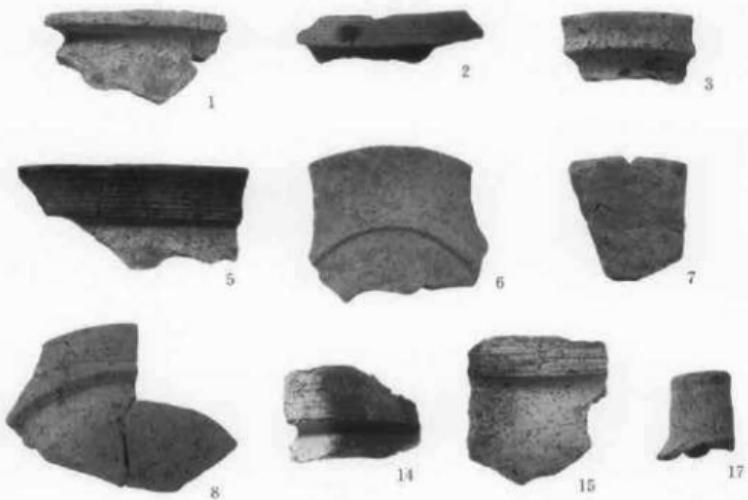


第 1 号住居跡出土土器

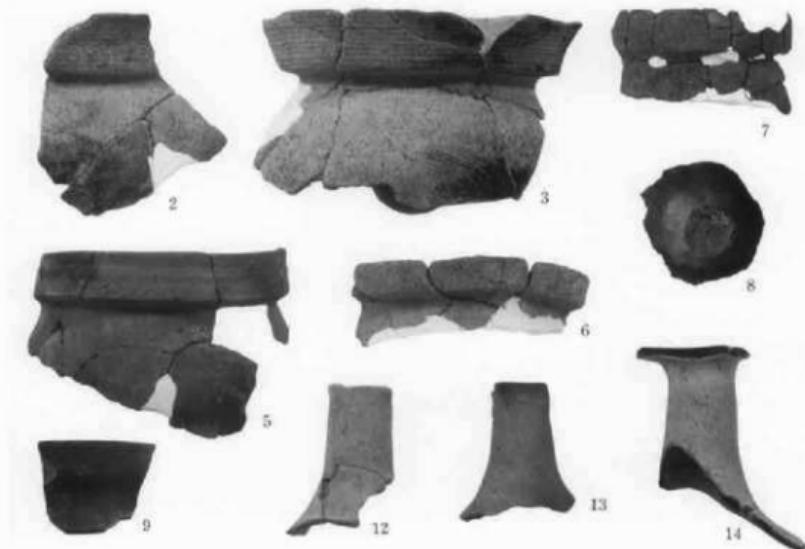


第 2 号住居跡とその周辺の出土土器

写真図版 12
平木 A 遺跡（平成 2 年度）



第 3 号住居跡と土坑の出土土器



包含層出土土器



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



第 1 号竪穴住居跡（南から）



第 2 号竪穴住居跡（北から）



第3号土坑（北から）



第3号溝（北から）



作業風景



紙石（第1号住居跡）



高坏（第8号ビット）



第 1 号溝（北から）



第 2 号溝（北から）



調査後全景（東から）



調査後全景（西から）



柱穴（南から）



第1号溝（北から）

写真図版 20
平木B遺跡（平成3年度）



第2号溝（北から）



落ち込み（西から）



1～2区遺構（西から）



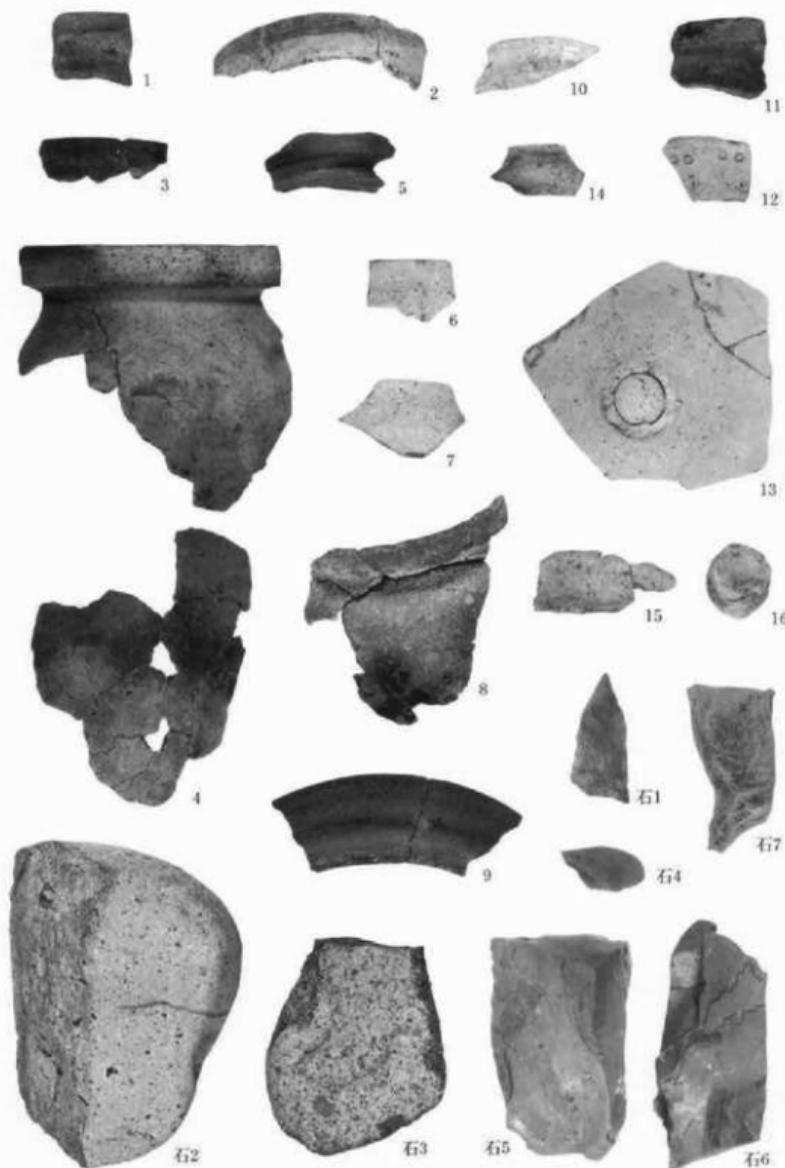
5～6区遺構（東から）



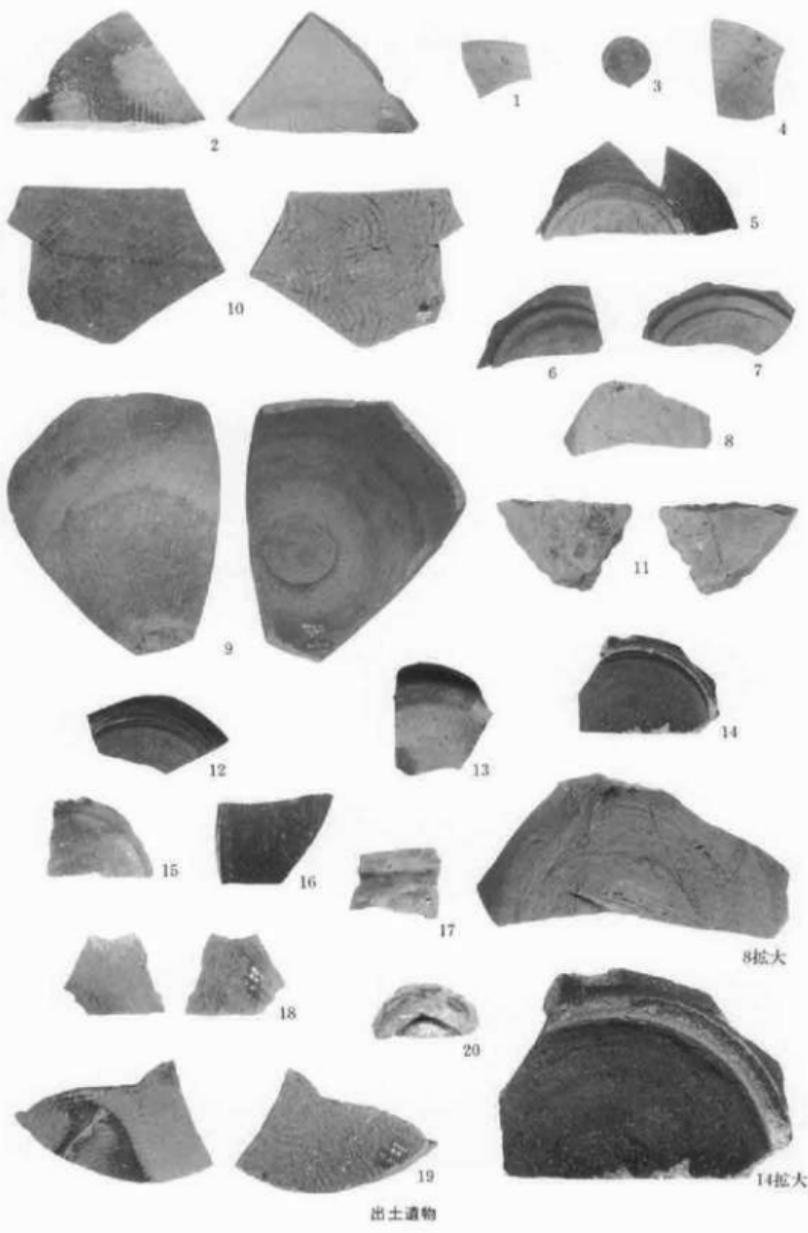
調査後全景（東から）



調査後全景（西から）



出土遺物



平木遺跡群

発行日 1994（平成6）年3月30日

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921 電話（0762）43-7692番㈹

印 刷 ヨシダ印刷株式会社
〒921 金沢市御影町19番1号
